

思はず、喜惣が眼を輝かした。

「さうだよ。——それで、所在は、まア僕の家として、本は、僕の蔵書の中から選擇して、さしあたり千冊ばかり寄附する。古書や、歴史に關したのものや、郷土史などは、まア僕の親父のやつを貰はうと思ふがね」

「あゝ、龍樹先生は、隠れたる郷土史の研究家ですからね」

「いや、それほどでもないが……」

志氣太は、煙草を持つた手で顎をなげながら、

「——でそのほかに、僕が今後ずつと、毎月二十冊か三十冊づつ新刊書を買つて寄附するとして、ま、大體そんなところで蔵書は出来ると思ふが、そいつをまア、誰でも勝手な時に來て、どしどしと借りて行くわけだ。その貸出しの仕事のほうは、僕ンとこのちいさんか、お袋にでもやつて貰はう。——それでだね、この圖書館を寄附するについて、ひとつ條件があるんだがね」

志氣太は、いささかいゝ氣になつて、やゝ開きなほつた調子で、あとをつづけた。

四

「それはほかでもないが」

と志氣太は切り出した。

「その青柳村圖書館は、僕たちの文化部と同じやうに、かまへは貧弱なものだけれども、しかし、僕たちの文化部と同様に、血の通つてゐる、清新潑瀾とした（生きてゐる圖書館）でなくちやアいかんと思ふんだ。で、そのためには、まとめて寄附する書物の選擇や、毎月購入する新刊書の選擇を、僕たちの文化部で指導的に擔當する。むろんいまでは、中央でも適當な推薦制度を設けて、立派な指導をしてゐるけれども、僕たちはそのほかに、特殊な地方的必要なぞも加味しなければ

ばならないから、だいたい、さういふ中央の指導の線に沿ひながらも、そのうへにわれわれ独自の立場を構へて、これを絶対指導的に責任を持つて選擇する。——これが、條件なんだがね。どうだね？」

「素敵です。じつに素敵です。……どうも、すみませんすね」

喜惣は、まるで自分が貰つたやうに、ひどく恐縮しながら頭をかいた。

「ぢやア、さういふことにするとして、早速處置をとらうね」

志氣太は煙草をひとくち吸ひながら、語調を改めて、

「——それはさうと、僕たちの文化部も、ひとつ、定時的な研究會、といったやうなものを持たなくちやいけないね」

「それですよ」

と喜惣が聲を弾ませた。

「——實は私も、そいつを痛切に考へてゐたんです。用事のある時だけ集まるな

んでいふのぢやア、私たち自身の、自己を高める、なぞといふ餘裕がありませんからね」

「まつたくだ。ひと月に一度でも、ふた月に一度でもいゝからね。——尤も、なにもそんなに、改まつたものでなくてもいゝわけなんだが……。ま、兎に角、一度また、遊びに來ないかね」

「ええ。是非、あがらしていただきます。こないだから、一度遊ばしていただくうと思つてゐるんですが、なんしろ、目下のところ、村會議員の選舉のことで、なにかと仕事に追はれてゐるもんですから」

喜惣は、急に苦々しい顔になつた。

「——これも、直接私たちの身邊に關係のあることでして、ゆるがせに出來ませんからね。それに、ほかの市町村は、みんな立派な人ばかりでせうけれど、御存じのやうに青柳村には、いまままで少しかんばしくないのが數人をりましたからね。

これは、この際、断じて刷新して貰はねばなりません」

「——うん。それは、まつたくだね」

いきなり飛び出した喜惣の強い語調に、志氣太はやゝめんくらつたが、すぐに大きくなづいた。喜惣は、聲をはげましていった。

「ところが、どうもさういふかんばしくない連中の中には、かうして村會の改選期が近づくと、まるで、戦争の切迫した時の、インドに對するイギリスの態度みたい、ガラリと手の裏を返すやうに妙に神妙にニヤニヤと顔つきまで變へてゐるやうなのが、間々ありますからね。そいつに村の人たちがうっかりひつかかつて、眞に正しい人を推すことを忘れてりするやうなことがあると、それこそ大へんですからねえ。——シッ。こらッ！　こらッ！」

豚が逃げかかったので喜惣は繩をひつばつた。そして、語調を改めていった。

「あ。さういへば、今度この選挙がすみまして少し時間が出来ましたら、男女青

年團の幹部を連れて、富橋の向ふにある教化指定村の神部村へ、見學させる豫定ですが、ひとつ倉松さんもおいでになりませんか。海岸の村でいいですよ」

「ふム、海岸の村——そいつはいいね」

「ぢやア、是非お誘ひませう。……あ！」

なに思つたかこの時急に喜惣は、青い顔になると、

「さうだ。まだ豚を七匹つかまさにやならん！　こいつア大へんだ。ぢや倉松さん。いづれまた……」

繩でくくつた豚を引っぱりながら、あわてて、家のはうへ駆け出して行つた。志氣太は、自転車へ乗つて走りだした。

が、新道を越して家の近くまでやつて來ると、行き違ひに出會つた一人の若い男の顔を見て、急にまた、自転車を停めた。

「ああ君。この頃来ないやうだが、どうしちまつたんだね？　もう注射はやめるつもりなのかい？」

自轉車へ乗つたまゝ片足を地面について、かう呼掛けた志氣太の聲に、青年は急に顔を赭らめると、誰も人は通つてゐないあたりの道路をもちもちと見廻した。

——この青年は、血液の中に或る種の傳染性の病毒を持つてゐて、その細菌をすつかり追つ拂ふために、しばらく前から志氣太のところへ注射を打つて貰ひに通つてゐたのであるが、それがどうしたのか、この頃まだ治療が終りもしないのに、途中から来なくなつてしまつたのだ。

「どこか、ほかの醫者にやつて貰つてゐるのかね？　それならいいけど……」
すると青年は、きまりわるさうに首をふりながら、

「いえ。さういふわけではありません……」

「だつたら君、治療は續けなきやア駄目だぜ。折角今まで金と時間といやな思ひを費して、だいぶよくなつて來たのが、途中でやめてしまつたらファイになつてしまふよ。進行性の病氣だからね。そんなに時間がかかるわけでもなし、それほど遠方でもないんだから、少し根氣よく治療を續けたまへ。君にはその病氣を治す責任があるんだから。——もしも僕が氣に入らないんなら外の醫者へ通つてもいいんだからね」

「いえ。決して、そ、そんなわけではありません」
青年は再び顔をあからめて、モヂモヂしはじめた。志氣太の顔が、急にふくらんだ。

「ぢやア、どうして途中でやめちまつたんだね？……うむ、金のことかね。もしそれだつたら……さうだ。君が將來さういふ拙劣な、非衛生な眞似を再びくり返

さないと約束すれば、僕は實費で治したつていい。兎に角来たまへ」

「はあ、すみません」

「いや、すみませんぢやないよ、君のためだけぢやないんだ、この問題は。君の將來の家族となる人たちのため、大きくいへば國家のためにも、その細菌をやっつけるべく、君は頑張らねばならんよ。ね」

「はア、それはよく判ります。ちや、また二、三日のうちに……」

「二、三日のうちに？」

と志氣太は眼をみはりながら、

「うーむ。君は億劫になつたんだね。ダメだよ、さういふ意志薄弱は。それこそ君の病氣より恐ろしい病氣だよ。二、三日などといはずに、今日すぐこれからでも始めたまへ。僕はもう、これで用事はないから協力しよう。君がほんとにその氣になつて、あくまで病氣をやっつけようといふ意志を持つたなら、それは、立

派だよ。少しも恥かしくはない。さ、来たまへ」

志氣太は自轉車を靜かに動かしはじめた。青年は頭を掻きながら仕方なさそうに志氣太のあとについて歩きはじめた。

二人は、間もなく倉松醫院へやつて來た。

ガランとした待合を通つて診察室へその青年を連れこむと、志氣太は早速注射の仕度にとりかゝつた。

むツと黙つたまゝ、机の上へアルコールランプや消毒器を並べ、その器の中へ水を注ぐと、ガラス棚から太い注射器を取り出して、筒を抜いたり、針をはづしたりして吟味してから、そいつを消毒器の水の中へ浸し、今度はアルコールランプをとりあげた。が、ランプの蓋は強くきさつてゐて却々とれない。志氣太は、両手でランプを絞るやうに持つてウツと力を入れた。するとギチツと音がして、ランプの胴が割れてしまつた。

志氣太は始めて苦笑を洩らした。

六

「ちいさん。おい、ちいさんアーン！」

扉口のところまで行つて、志氣太は、母屋のはうへ聲をかけた。

「はい」

遠くのはうで返事がして、やがて千尋が、エプロンで手を拭きながら、廊下傳ひに急いでやつて来た。

「お歸りなさいまし。お洗濯をしてゐたものですから。すみません」

「あのね、アルコールランプをゑましてしまつたんだ。代りは何處にあるかね？もう一つあつた筈だらう？」

「あら。まだ申上げませんでしたか知ら——その豫備のランプは、きのふ、芳つ

ちやんが粗相して、割つてしまつたんですけど」

「なに、芳坊が割つてしまつた？」

「ええ。きのふの夕方、小母さまがやく薬の根をお焼きになるとおつしやつて裏の縁でお使ひになつてゐらした時、芳ちやんが飛石の上へ落してしまつて……」

「仕様がないなア。ちやア炭火を持つて来てくれ給へ。注射器を消毒するんだ」

「はい。すぐ持つて参ります」

千尋は、そのまゝ、母屋のはうへ駆去つて行つた。

志氣太は机の前へ戻つて来ると、腰を下ろしながら、青年へいつた。

「少し待つてくれたまへね」

「は、ど、どうぞ」

青年は、またしてもポツと顔を根らめると、氣まづい對坐をもてあましたやうに、頭をかきはじめた。すると志氣太は、わらひながらいつた。

「君は、いやに恥かしがるねえ。なにも今更恥かしがることはないぢやないかね。病氣になつてしまつた以上は仕方がないよ。ほんとに恥かしかつたなら、ハキハキと病氣をなほして、これからは再びさういふ過失をしないやうにすることだね」

「はア」

志氣太は、露骨に青年の顔をみつめながら、さらについてた。

「——どうも、なんだねえ。これは君だけにいふことではないけれど、どうもさういふ妙な羞恥心や、一種の氣おくれといったものは、さういふ病氣の撲滅上、ひじょうな障害になつてゐるばかりでなく、そもそもさういふ病氣を蔓延させる大きな原因の一つにもなつてゐるね——僕は、青年の體に元氣が満ちあふれてゐることは、結構だと思ふ。けれど、さういふ問題は、もつと賢明潤達に處理しなければいかんよ。恥づべきことは、病氣以後にあるのではなく、病氣以前の態度にあるんだ。いつたい、さういふことをいつまでもジメジメした蔭の問題にして

をいたり、無暗と口にすることをさへいとはしがつたりするやうな一般の風潮といふものも、下らないよ。さういふことから生じる無智、無節度、非衛生なぞのために、相當な教養を持つた人でさへ、とんでもない過ちを犯して困つてゐるのがよくある。——まアひとつ君も、早く健全な體になつて、サツサとお嫁さんを貰ふんだね」

志氣太は圖にのつて喋りつづけてゐたので、千尋が臺十を持つて靜かにはいつて來たのに氣がつかかなかつた。が、青年の方にはそれが判つたので再び顔を赧らめた。するとその顔を見て志氣太はいよいよムキになり、まだ判らぬのかとばかり喋りつづけた。

千尋は志氣太の口から「お嫁さんを貰へ」といふ言葉が飛び出した時に、キラリと眼を光らしたやうであつたが、話の前後の意味は全然わかつてゐないらしく割に平氣な顔をして、臺十を持つたまゝ志氣太の後ろへ寄り添つてきた。

「あの、お火を持つて参りましたけど」

千尋の聲に、いままでいい氣になつて喋つてゐた志氣太は、やつと彼女の來たことに氣づいたらしく、ふと口をつぐむと、少しあわてた様子で振り返りながら「あ、ぢやア、小さなこん爐があつたね。あれをここへ出して火をついでくれたまへ」

と、やや氣むづかしげにいつた。

青年は、もう顔を赧らめてはゐなかつた。神妙にかしこまつて、遠慮深い横眼で、千尋のはうを見てゐた。

「あの、消毒でしたら、あたしいたしますけど」

「いや、僕がやるからいいよ、兎に角、火をついでくれ給へ」

ぶつきらぼうにさういつて、志氣太は青年のはうへ向きなほると、今年の麥の稔りは、去年に較べてどうだとか、蠶は初眠にはいつたかなぞと、こんどは普通の世間ばなしをはじめた。

千尋は、薬局のはうの戸棚からこん爐を出して來ると、それを志氣太の横の机の上へ置き、火箸を持つて臺十の火をつぎはじめた。

と、半分くらゐ火をつぎかけた時だつた。

ふとした手許の狂ひで火箸の先がこん爐の椽にあたり、移しかけてゐたまつ赤な炭火のひとつがコットンと机の上に落ちると、そのまゝコロコロところげてはつと思ふまに志氣太の膝の上に落ちかゝつた。落ちかゝつたのであるが、その時、思はず千尋の白い手がつと伸びて、その火をぢかに掴んで拾ひあげると、素早くこん爐の中へ投げ込んだ。

ヂ、といふやうな音とも匂ひともつかぬ氣配に、ふいと志氣太は振り返つた。

「どうしたの。落としたの？ 火傷しやしないかね？」

「いいえ、別に。なんともしませんわ」

あわてて答へた千尋の眼と、振り返つた志氣太の眼とが、思はずカチリとぶつ
かつた。と、志氣太はギクツとなつた。

——いままで見てゐた千尋とは、まるで違つた別の千尋を、その眼の中にみつ
けたからだ。

センプリでも吞まされたやうな顔をしながら、志氣太は青年の方へ向きなほつ
た。

千尋は、手先きを小さくふるはしながら残りの炭火をつぎ終へると、空になつ
た臺十を持つて、母屋の方へ出て行つた。

志氣太は、再び青年と大きな聲で世間話を續けはじめた。けれどその聲は、前
より少し大き過ぎるやうであり、話しどころどころでひツかかつたりした。

火にかけてた消毒器の中では、グツグツと熱湯がたぎりはじめた。

千尋が母屋の方から戻つて來た。黙つたまゝ藥局の方へ行かうとするのへ、志
氣太はちよつと迷つてから、怒つたやうな聲でいつた。

「ちいさん。ほんとになんともなかつたのかい？ 大丈夫かい？」

「ええ。なんともありませんでした」

千尋はいつも通りの顔で笑つてみせると、藥局へはいつて、青年のカルテでも
出すのであらう、机の前でゴソゴソしはじめた。

それから暫らくしてから、青年は注射をすますと、これからは眞劍に治療を續
けます、と明るい聲で進んで志氣太に約束して、歸つて行つた。

青年が歸り、千尋が藥局を出て母屋の方へ引上げてしまふと、志氣太は一寸の
あひだ獨りでポケンと何かを考へてゐたが、すぐにふと思ひついたやうに、いま
で千尋のゐた藥局の方へ靜かにはいつて行つた。

薬局へはいると、志氣太は、無数の薬瓶がズラリと行儀よく並んでゐる棚の側へ歩みより、その或る部分へ顔を摺りつけるやうにしながら、キチンと一分の隙もなく並んでゐる瓶の列を調べはじめた。

と、間もなく、一つの瓶が、レットルを横向きにし、少し位置をすらしたまゝ置かれてあるのをみつけた。

それは、この二三日ぜんぜん使つた筈のない、デルマトールの瓶だつた。

——なんともなかつたといつたけれど、あきらかに千尋は火傷をしてゐる。それも一寸赤くなつた程度のもではなく、水疱くらゐ出来たに違ひない。

志氣太は、口をへの字に曲げて、腕を組んだ。

すると、ふとあのときの、千尋の眼が思ひ出された。その眼の中には、たしか

に、はじめてみる千尋があつた。ほんの一瞬間のことではあつたが、それは志氣太には、なんとも説明のつかない正體のものであつた。

志氣太は、ふと、アルコールランプの焰を思つた。色も光りもほとんど見えなけれど、ガラスをも溶かすやうな、熱烈なその焰を思つた。

急に志氣太は、いままでになくうろたへた顔になると、薬局を出て待合を抜け下駄をつつかけて表へ出た。

別に、どこといふあてがあるわけではなかつたが、邸の周囲をグルリと廻つて裏の桑畑のはうへぶらぶらと歩いて行つた。

桑畑には、もうすっかり大きくなつた桑の葉が、新鮮な艶をたたへて茂つてゐた。

志氣太は、桑畑の中を歩きながら、ふと、遠い昔のことを思ひ出した。それは一人の少女についての思ひ出だつた。

志氣太は、これまで、女性に對して特別な感情を抱いたことは、一度もなかつた。さういふことには殆ど縁なく育つて來た。が、ただ一つだけ例外があつた。それがその、少女のことであつた。といつても、むろん幼い頃のことであるから戀愛なぞといふやうなものではない。

その少女は、志氣太の家の近くの、今はなくなつた酒屋の娘だつた。確か名前は、三保——といつた。

ちやうど夏のこと、畑の桑の木には、このへんで桑葚と呼ぶ赤黒く熟れ切つた甘い果實が、いっぱい生つてゐた。その畑の中へ、志氣太は三保と一緒に歩いて、桑葚を片ツ端から千切つては、食べて廻つた。面白がつて、腹のくだるほど食べた。しまひには、二人とも、滴る果汁で口のあたりをまッ赤にしなが、キヤツ／＼といつて桑畑の中をころげ廻つたものだ。

そんなことを、ふと、志氣太は思ひ出したのだ。志氣太はその頃その少女が好

きだつた。

——今頃どうしてゐるだらう？　もうきつと立派な母親になつてゐるに違ひない。

尤もこないだ、松太郎の女房が、その酒屋のことについて母と話をしてゐたのを何氣なく聞いたところによると、三保はまだ家がこの村にある頃にどこか遠くの人と結婚したが、運わるく失敗して暫らく家に歸つてゐたといふことだつたが……。

「いや。どうも今日は、妙な日だぞ」

ふと志氣太は立ち止まつて顔をしかめながら呟いた。

と、その時。桑畑の向ふの土堤の蔭で、何やらゴソゴソと音がした。志氣太はギクツとなると、歩み寄つて土堤の向ふを覗いてみた。するとそこには何處から逃げ出してきたのか一匹の豚が、しきりに畑の中をかき廻してゐたが、志氣太の

顔を見るとあわてて逃げ出した。

(あ、定森の家の豚だな)

急に気づくと、志氣太は下駄をつっかけたまゝ白衣をひるがへして追つ駈はじめた。

海 ひ ら く

—

(仁天堂、倉松醫院)

そんな看板のかゝつた古風な冠木門のもう一方の柱に、

(青柳村図書館)

と、やゝ小さいが、これはまた真新しい看板が、たぶん字の下手な志氣太が龍樹先生に頼んで書いて貰つたものであらう、達筆の墨痕もあざやかにかけられてから、もう十日あまりになる。

しづかなはつ夏の日の、午前だった。

何處からかさはやかな花の香をのせた微風が、吹いて来る。

——ちよつと、圖書館をのぞいてみよう。

門をはいつて、正面玄関から、醫院の待合へはいる。待合から診察室のほうへ行かずに、奥へ向つてすぐ次の部屋が（青柳村圖書館）である。

もと、龍樹先生の時代に、醫療器具の物置に使つてゐた豫備室で、その大きなガラス戸棚を利用して、今はギツシリと書籍がつまつてゐる。椅子や机は、二人分しかない。

尤も、青柳村圖書館は、貸出専門の圖書館であるから、讀書室の設備はいらないわけであるが、それでも、診療を受けに来た患者達の、待合時間にも大いに利用出来るやうにとの志氣太の配慮から、かうしてわづかなながらも椅子や机が置いてあるのであるが、どうしたわけか人影はぜんぜんない。讀書室に人影がないだけではない。待合にも患者の姿はない。——尤もこのほうは、今日は若先生がお

留守であるから、仕方があるまい。

診察室の窓に面した机によつて、千尋が、たつた一人だけ、さつきから、なにやらしきりに本を讀んでゐる。その本の向ふに、（圖書閱覽者控）と書かれたノートが一冊、ほとんど新らしいまゝで置かれてある。

千尋は、ときどき、書物から顔をあげては、溜息をつく。顔をしかめる。あくびをする。いかにも、つまらなさそうだ。よくよく面白くない本らしい。といふよりも、讀書そのものがサツパリ面白くない、といった容子である。

玄関のほうで、子供のあし音がし、松太郎の家の芳夫が、いたづらさうな顔をしてはいつて来た。

「ちい姉さま。来たヨ」

「あら、いらつしやい。なに用？……遊びに来たの？」

千尋は、目がさめたやうに顔をあげた。

「ううん。本を見して貰ひに来ただヨ」

「あら、また本を見に来たの？」

「うん。なんべん見たつて、いいづら？——そいだつて、センセイは、トシヨカンはなんべん見たつていいちゆつたヨ」

「まア。それは、なんべん見たつていいわよ。——ちやア、今日は、なんのご本を見るの？」

「うん。きのふ見た本だヨ、ヒョーキのシャシンのついとる本だヨ」

千尋は、苦笑しながら立ちあがつた。図書室から、一冊の科学書を持つて來ると、芳夫に椅子を興へながら、

「さア、貸してあげます。子供は、大事に見なければいけませんよ」

「うん」

千尋の横へ並んで腰を下ろすと、芳夫は、楽しさうに足をバタ／＼やりながら

さまざまな飛行機の寫眞のついた頁を、大事さうにまくりはじめた。

千尋も、再び書物へ向つた。が、間もなく、顔をあげると、ふたたび、溜息をつき、眉をしかめ、あくびをする……

どうやら、退屈なだけではなく、クサリきつた憂鬱の色さへ、その顔に浮びはじめた。

芳夫が、やがてひと通り寫眞を見終つてしまふと、いたづらさうに首をのぼして、千尋の手許をのぞき込んだ。

「なアんだ。ちい姉さまの、字ばかりちやアないか」

「まア、ひとの本などのぞかずに、自分の本を見るものよ」

「うん。そいだつて、もうみな見ちやつただもん……ちい姉さまは、そんな字ばかりの本、面白いかい？」

すると千尋は、ちやうど出かかつた三度目のあくびを噛みころしながら、いそ

いでいった。

「ええ、面白いわ。とても面白いわ」

二

「ふーン。そんな、字ばかりの本、面白いかなア」

芳夫は、いかにも心外さうな顔つきで、急に真面目くさつて書物に向ひはじめた千尋の横顔を、小さな首をひねりながら眺めてゐたが、そのうちに、こつそり自分の寫眞の本を伏せると、もうすつかり飽きあきした様子で、表のはうへ出て行つてしまつた。

芳夫がゐなくなると、千尋は、白い二の腕を袖口からニュツと出して、大きくひとつ伸びをした。それから、思ひきりボタンと本をとじると、机の上へ肘をつき、その掌の上へ顔をのせて、しばらくポケンとしてゐたが、やがてクサリきつ

た顔をしながら、眼の前の、(圖書閲覧者控)と書かれたノートをとりあげた。

——實は、さつきからの千尋の憂鬱は、このノートをひろげて見ると、よくわかるのである。

青柳村圖書館が開館になつてから、もう十日あまりにならうというに、なんとそのノートの讀者氏名欄には、まだ一人も、名前が書いてないのである。ただ、そのノートのお尻のはうにつけてある、讀者の統計表の中に、毎日二人だけづつ貸出しでない讀者の数が、遠慮深くしてあるだけだ。といつても、その讀者の内譯をみると、一人は男の子供で、一人は女の大人、その二人が、二人だけが毎日きまつて、判で押したやうに記入されてゐるのだ。いふまでもなく、この圖書館の係りである千尋自身と、寫眞や繪だけ見に来る隣りの芳坊との、二人だけだ。

これはいつたい、どうしたことであらう。せつかく圖書館は、開いたのだけれ

ど、読者はいつかうに無いのである。

「なんだ。二人だけかね。仕様が無いねえ」

いつか志氣太が、図書館の成績を千尋に訊ねた時に、閲覧者毎日平均二人ときかされて、志氣太は顔をしかめながら、さうこぼしたものだつた。

「でも、まアいいや。二人だけでもあれば……。まアそのうちには、もつとふえて来るよ。定森君に、もつと何度も、同状で廣告して貰はふ」

むろん志氣太は、千尋が報告したその毎日平均二人の読者といふのが、ほかならぬ千尋自身と、隣りの芳坊であることなど、とんと知らないのであるから、すこぶるいい氣なもので、さう、樂天的にきめこんでしまつた。

弱つたのは、千尋だつた。

せつかく志氣太が意氣込んではじめた図書館に、ぜんぜんお客のないことなど志氣太に知らせたなら、きつと力をおとすに違ひないと、自分と、毎日繪を見に

来るだけの芳坊とを、読者の數に計上して、なんとか恰好をつくらひながら、本物の読者が来るのをひそかに待つてゐたのであるが、その本物はサツパリやつて來ない。仕方がないので、きのふもけふもと、自分と芳坊の數だけを毎日記録しつづけたのだけれど、さうなると、義理にも讀まないわけにいかず、どうもあまり面白くはなかつたけれど、かうして暇を見ては、大いに図書館を利用しなければならぬといふ、くるしい仕儀に立ちいたつたのであつた。

——實際（青柳村図書館）の藏書の中には、千尋が心ひそかに望んでゐるやうな、熱烈なる戀愛小説といふやうなものは、ほとんど見當らなかつたからだ。……やがて、千尋は（閲覧者控）のノートをひろげると、たつたいま出て行つたばかりの、貴重な読者の一人である芳坊の數字を、今日もまた、自分の數字といつしよに、大事さうに記帳すると、本をしまつて、さう、ややホツとした顔を見せながら、母屋のはうへ立去つて行つた。待合の時計が、しづかに十時を打ちはじめ

めた……

——それにしても、このやうな青柳村図書館の實情も知らず、いつたい若先生は、朝から何處へ出掛けたのであらう。

三

バスが驛前の廣場で停ると、幾人かの客にまじつて、八人の若い男女が、ぞろぞろと降りて來た。

富橋の南にある教化指定村の神部村へ、見學に出かける青柳村青年團の幹部有志と、引率格の喜惣、それから飛入りの志氣太——なぞの一行だった。

神部村へ行くには、この富橋の驛前で、更に夏見半島行のバスに乗り替へねばならない。

みんなは、廣場を横切つて、そのバスの停留所のはうへあるきだした。

娘が四人に、男が四人。男の中の二人はカーキ色の團服を着てをり、娘たちもそれぞれ質素なみなりをしてゐるのだが、中にたった一人だけ花が咲いたやうなのは、稻垣の矢奈子だった。

もともと矢奈子は、村の女子青年團といふやうな仕事は、あまり性に合はず、平素は小馬鹿にしてゐてはなはだ消極的にしかつき合つてはゐなかつたのであるが、今日は違ふ。なにしろ海に見える村へ行くといふのであるから、村いちばんのロマンチストを以つて任じてゐる彼女がこれを見逃す筈はない。早速ハイキングにでも出掛けるやうな浮き浮きした氣持で家を出たのであるが、ところが、村の停留所で落合つた一行の中に、意外にも妙な飛入りの志氣太が加はつてゐるのを見ると途端に胸騒ぎがして面白くなつた。

で、早速仲間の娘たちをそれとなく牽制糾合して、なるべくきたないものとは席を同じふせず、男女の別は截然とつけませう、といったやうな顔つきで、バス

の中でもバスを降りてからでも、出来るだけ男の組から、離れるやうに離れるやうにと娘たちの先に立つて行動しはじめた。

男の連中は、しかし、呑気なものだった。

四人とも一緒になつて、二人の青年は、戦地へ行つてゐる仲間のことや戦争のことなどを話し合ひ、志氣太と喜惣は、はやくも熱をあげて、なにやら話に夢中になつてゐる。

で、しぜんと娘達からはおくれしてしまひ、半島行の停留所まで来た時には、もうバスは出發するばかりのところだった。

バスの中には、まるで貸切みたいに、ほかの客は少なかった。

「——まア、さういふわけですわね」

と、やがてバスが動き出すと、喜惣が志氣太へ向つて、話の續きを切り出した。

「大小合はして、いま青柳村には、豚を飼つてゐる世帯が三十四戸あるんです。

で、この連中の間での話合が、いま申し上げたやうな次第でその場でまとまつてしまひましてね、早速私が、代表といふことになりまして、昨日、近接の村々の役場を廻つてみたわけですが、すると何處でもこの問題には惱んでゐたと見えて、早速私の意見に賛成してくれまして、來月の村常會に諮つてそれぞれ村内の意見をまとめてくれる、といふことになつたわけです。で、その上で富橋市へお願いして、各家庭の厨芥を組織的に集めさして頂けるやう話を進める、といふ段取りになるわけですが、しかしまア、これだけ百姓仲間の意見が破綻なく纏まつたといふだけでも、八分通りの成功だと思ふんです——ま、さういふ次第で、ことは單に豚の自給飼料に關する問題に過ぎませんが、それでも、どんな問題に限らずかうして眞剣に工夫し研究し、その成果を誠意を以つて、隠せず人々の前に押進めて行けば、一般の人達といへども決して盲目ではないといふ確信を、またしても裏づけられたことが、私にはなによりうれしいのです」

「そこだよ。君」

急に志氣太が、大きな聲を出した。

四

いきなり飛び出した志氣太の大声に、バスの前のはうに腰かけてゐた娘達は、思はずうしろを振りかへつた。が、志氣太は、そのやうなことにはほとんど氣づかぬ容子で、喋りはじめた。

「その精神こそ、僕たちの周囲を、村を、日本を、明るく正しく立派に育てあげて行く原動力だよ。その氣持を、忘れてたり失つたりしたら、ダメだね。早い話がこんどの図書館のことにしても、手前味噌だけれど、さういふものが基調になつてをればこそ、まア順調に滑り出すことも出来たんだと思ふがね」

「あゝ、図書館といへば、その後どんな風ですかね。私たちも出来るだけ宣傳を

してはゐますが」

喜惣の言葉に、志氣太は鷹揚にうなづきながら、

「うん、まア、ポツ／＼やつてるね。まだ人数は少いけど、利用者も毎日あるやうだし……」

「あ、さうですか。毎日読者があるですか？」

「あゝ、少なくとも二人づつくらゐは、あるらしいね」

「さうですか。ちやア、開館當初としては、そんなに悪い成績でもないですね……ちやアひとつ、少し手がすきましたら、私達も大いに勉強させて頂きませんが、なにより、村の人たちに、もつとドシ／＼宣傳いたしませう」

「さうだね。それは是非、やつて貰はんとこまるネ」

バスはもう、いつのまにか富橋の街を出はづれて、車窓には、志氣太の顔のやうに宏漠たる高瀬ヶ原の原野が、はてしもなくつづいてゐた。

一人もお客のない図書館の館長は、なにも知らずにいい氣になつて喋りつづけてゐたが、やがて、調子を改めていった。

「それはさうと、定森君。けふはひとつ、折入つて君に相談したいことがあるんだがね」

「え？ 相談？——」

よく（折入つて相談）をする人だといふやうな顔つきで、喜惣は志氣太のはうを見返つた。

「いや、ほかでもないんだがね」

と志氣太は、まじめくさつて切り出した。

「——この前、いっただつたか、いちばんはじめ君に會つたときに、僕は、村へ歸つて以來、醫者としてなすべき仕事について考へてゐるといつたが、その考へがこのほど決つたんだよ。——僕は、村へ歸つて以來、自分の生れたこの地方の、

最近の事情について少しばかり注意をして見たり、ここ數年間に亘る患者の病別統計表を作つてみたり、ま、そのほかいろいろ考へてみた結果、僕が青柳村で、まづなにを措いても第一番に、醫者としてとりかからねばならない仕事は、やつぱり、結核についての對策にあることがわかつたんだ」

志氣太の顔からは、いつのまにかあらゆる表情が消えて、假面のやうな冷たさが漂ひはじめた。

「——君も知つての通り、この地方は、いま、國內のほかのどの地方にも劣らぬ鋭さでもつて、新らしい日本の生産地帯の一つとしての様相を、見せはじめて來てゐる。おほぜいの産業戰士たちは、大事な兵器を造るために汗みどろになつて働いてゐるし、百姓は百姓で、食糧増産のため不眠不休の努力をつづけてゐる。そして、むろん僕たちとしては、どうしても戦争に勝抜くために、この新らしい事態をどこまでも支持し、そいつの強化のために進んで協力しなければならぬ

ことは、いふまでもないわけなんだ。——ところが、人間の躰といふ奴は、なにも工場や農村に限らず、三月や半歳ならば兎も角も、永い間に亘つてはげしく使ふ時には、油断をすると兎角病氣が頭を出しやすい。しかも決して餘分にはない食糧の中で、出来るだけ休養時間も切りつめ、また、中には、折角のその大事な休養時間をさへ、そのへんにまだのさばつてゐる悪い環境に誘惑されて、不健全な、非衛生な娯樂の追求に費して心身を奔命に疲れさすやうな者も出たりして——さういふのは決して休養ではないんでね。或る學者などは、いろいろの職域の産業戦士の疲勞を、正しい勤勞によるものよりも、さういふ不健全な娯樂の追求で夜ふかしをしたりして、ほんたうの休養をおろそかにするところから生ずるもののはうがはるかに多い、とさへ報告してゐるがね——」

五

まるで象のそのやうに小さな、見やうによつてはひどくたよりなげな志氣太の下り眼ではあつたけれど、喜惣はその中に、いつになくお醫者さんらしい威壓をキラリと覺えて、射すくめられたやうにジツとしたまゝ、話をききつづけてゐた。

志氣太は、珍らしく落着いた、低い聲で、あとをつづけた。

「——まアさういふわけで、いまもう既に、青柳村に病人が殖えだしたといふわけでは決してないが、かういふ條件の中で、このままで放つてをくときには、いまままで以上に病人が、特に結核などが、殖えやすいことは自明の理なんだ。——ところで、この新らしい皆働體制といふものは、三年や五年でをはるやうなしみつたれたものではなく、今後おそろく永久に實施さるべきものなんだから、富川の工場にしても、さういふ病氣を未然に防ぐ意味でも立派な病院やそのほかの衛生施設を備へて着々と萬全を講じてゐるし、このへんではいちばんさういふ患者

の多い富橋にしても、それに對する施設は出来はじめたし、また國としても、あたらしく出来た日本醫療團によつて活潑にその方面の施策を企ててゐるわけなんだが、けれども、僕たち郷土にある醫者としても、さういふ機運を黙つて見てゐるわけにはいかんだ。で、僕は、これからひとつ、さういふ時代の要望に進んで應へて、青柳村から結核を追つ拂ひ、そいつを撲滅させて、みんながほんたうに強いからだで、畑に、工場に、元氣ではたらくことが出来るやう、少しばかり仕事をしてみようと考へたわけだよ」

志氣太は、煙草を一本とり出して口にくわへた。

が、マッチをすつて火をつけようとするのだが、窓から絶えず吹きこんで来るさわやかなのはつ夏の風に邪魔されて、いつまでたつても火はつかない。五本すつても、六本すつても、あせればあせるほど、する片ツ端からマッチの火は吹き消されてしまふのだ。たうとう志氣太は、えいとばかり諦めてしまつて、もとのボ

ケツトへ煙草をしまふと、ふたたび喜惣のはうへ向きなほつた。

一行の中には、そのをかしなありさまを見てゐた者も何人かあつた。けれども誰もわらふものはなかつた。

いまや、海へ行くバスの中には、ふしぎな空氣が醸されはじめてゐた。

さつきまで、友達の噂ばなしばかりしてゐた二人の青年は、いつのまにか忘れやうに話をやめて、志氣太と喜惣の會話にしづかに聞きとれ、前のはうの座席に陣取つて、窓の外の風景になにかとざわめいてゐた娘達も、いつかしら躰をはんぶんこちらへネヂむけるやうにして、志氣太のお喋りにジツと耳をかたむけるのだつた。

ところが、そのなかで、こちらをぜんぜん向かないのが、一人ある。

——矢奈子だつた。

もとより矢奈子といへども、つんぼではない。いくらいちばん前に腰かけてゐ

たとても、客の少い静かなバスの中で、志氣太の聲が聞えぬ筈はなく、また、その言葉の意味が理解されない筈はない。いやそれどころか娘達のだれにも増して彼女にはそれがよく判つたにちがひない。けれども、よく判れば判るほど、彼女は知らん顔をして、断じてうしろなどは振りむかないのである……。

だが、そのやうなバスの中のふしぎな空気には、相變らずとんと志氣太は無頓著で、ふたたび話のあとをつづけるのだつた。

六

「なに、病氣なぞといふものは結核でもなんでも、ひとりでに癒るものだよ」

と志氣太は、明るく切り出した。

「たゞ、さういふ自然治療の力を邪魔してゐる有形無形のいろいろな條件を、醫者や患者自身はむろんのこと、みんなして力を合はして正しく處理して行きさへ

すれば、決して恐るべきものではないんだ。また同じ意味を進めて、國家の方針や國民の覺悟がしつかりしてをれば、生産擴充、産業の發達といふことと、國民の體力向上といふことは決して矛盾するものではなく、立派に一致發展するものなんだ。今日の獨逸がそのよい例を見せてゐるよ。——ところで、僕はまづ、青柳村の人達全部について、結核の早期診斷を實施して見ようと思ふ。といつてもみんな一べんにはやれないから、まづ、國民學校の生徒、次に青壯年、それから老年者といった順で、このうち既にはかの施設や團體で、その檢診を済した者を除いた人達を、毎日一定の時間と人數をきめて順次やつて行きたいと思ふ。でこのうち、學校のはうは、もう話がついた。實は二三日前に、僕が親爺から校醫を引繼ぐことについて、校長さんが村長を代理して來られたんだが、その時既に話をきめて置いた」

「あゝ、そのことでしたか。きのふ土曜の朝、村長が縣へ出張する前に、なにか

校長さんと、ツベルクリンをどうとか、かうとかつていつてましたが」

急に聲をはずませて引きとつた喜惣の言葉に、志氣太はうなづきながら、「うん。それだよ。まだ君に話されなかつたと見えるね——でその診断は、学校の生徒全部について、一應ツベルクリン注射を実施して見て、その結果陽性反應者には——これは、知つての通り過去に於て菌の感染を受けてゐるといふだけのこと、必らずしも發病者とは限らないのだから、さう心配することはないんだが。それにまた、子供ならば陽性者も、多くとも、十パーセントか十五パーセントくらいものだらうとは思ふが——兎に角その陽性者については更に赤沈検査やレントゲン検査を適宜受けさしてみても、そのうちから、恐らく一層少數の、發病者を拾ひあげる。で、この發病者については、その病状や家庭の事情等に從つて、それぞれ最も適當な指導を行ひ、特に療養を要する者でその出來ない貧しい人については——これは又更に少數になると思ふが——方面委員や衛生組合の

役員に協力して貰つて、救護法だの、母子保護法だの、濟生會だのをはじめ、最近出來て來た各種の保護事業など、ありとあらゆる公私の醫療救護事業を思ひ切り活潑に活用して、それでも足らん時には、僕がまづ自腹を切つて、それから、村の有志の奮起を促す。——實際、陛下の赤子を、一人でも貧乏のために病氣に苦しめさして置くのは、村の恥だからね。いや、だいたい人的資源の活用にならんよ。……ところで、ま、いまいつた調子で、學校の生徒から始めて、漸時村民全部に及ぼすわけだが、この仕事を進めて行くかたはら、時折、學校だの常會だので、講話や相談等によつて、一般的な衛生指導もして行きたいと思つてゐる。實際、ちよい／＼耳にする話だが、この頃は常會も同じ話ばかりでタネが盡きて困るなどといふ人があるが、さういふ風に醫者に衛生指導をさせるとか、その他いろいろの専門家に、指導的な話をして貰ふといふやうなことを、もつとドシドシやるべきだと思ふね」

志氣太は圖に乗つて、俄然脱線し、餘ぶんなことまで喋りはじめた。
バスはいつの間にか半島の根を横断して神部村につゞく海岸の部落にはいり、
ふと車窓の外には、斷崖の裾に打寄せる太平洋の白い渚が、木立の間からチラリ
と見えて過ぎ去つた。

七

240

「ところで、その、学校の生徒の早期診断のことだがね」

志氣太は、改つて切り出した。

「ちやうどこれから、農繁期で一般の人達は忙がしいから、このいきに、といつてはをかしいが、早速生徒のはうは始めることにして、この四五日うちから、養護訓導の人に手傳つて貰つて、まづ高學年からとりかゝることにしたんだ。それで、こゝに問題があるんだが——實は、大體その三段構への検診のうちで、最初

のツベルクリンと、それから赤沈検査は僕のところで出来るが、情況によつて實施しなければならぬレントゲン検査のはうは、實はまだ僕のところに設備がないので、いづれ將來はなんとかするつもりだが、それまでの間臨時の處置として富橋にある僕の親爺の識合ひの醫師に頼ひして、その人の特別の盡力にあづかることに既に快諾を得た。それで、そのツベルクリン注射と赤沈のはうは、僕が全部無料で勞力奉仕をし、注射劑の實費については、校長さんがすっかり乗り氣になつて、校費の衛生費の中から大部分買つて呉れることになつた。で、このはうは問題ないんだが、あとの富橋のお醫者さんのレントゲンのほうだが、これも特別の盡力をしてくれることになつてはゐるが、しかし實費だけは、これはどうしてもお支拂ひしなくては相濟まん」

241

「いつたい、いくらくらゐかかるんですか？」
たまりかねたやうに、喜惣が口を入れた。

「いやそれはね。情況によつてなんだから、まだ今からいくらとはいへないが、なんしろレントゲンのほうは實際に経費もかかるんだから、これを村民全部のうちに必要なものに実施するとなるとどんなにすくなくとも千圓や二千圓はまづ用意しなければならん。——それつばしの金は僕が出したつていゝが……」

「いけません。それはいけません。そんなにごへもこへも御負擔をかけては」

「いやまア、聴きたまへ。どうせ僕は、土藏の一本や二本は叩き潰すつもりだが——尤も何本もあるわけではないがネ——兎に角そんなに始めから僕が、あちらへもこちらへも寄附ばかりしてしまふと、親爺が眼をまわすくらゐはなんでもないが、實際問題として、金持でもない僕が案外早くクタバつちまつて、折角の理想がお伽斬みたいなものになつてしまつてはそれこそ大へんだ。そこでだね。ひとまづこの金だけは、役場のほうでなんとかして貰はふかと、ま、さう計畫してゐるわけだがね」

「判りました」

喜惣が意氣込んでいった。

「大へんよく判りました。涙の出るやうな有難いお話です。早速庶務へ連絡をとつて、村長に話してみませう——實はいま、増産奨励費のことについて、追加豫算案を準備中ですがね。そいつへひとつ、緊急衛生費として抱合はせませう。なんしろご存じのやうに、只今はいろいろと村費もかさむ時でして、財源の捻出にも苦心があるわけですが、しかしこれは、非常に大事な問題ですから、是非とも皆様の御熱意を訴へて、せめて最低千圓でも、なんとかひとつ頑張つて貰ひませう」

「ウム。さうして貰へれば萬事計畫通りに行くね。——いやだいな喋つたが、これで、僕の相談といふのは終りなんだ。ちやア是非ひとつ、頑張つてくれ給へ。僕のはうは、今度の月曜から早速とりかゝる」

志氣太はさう話を結んで、もう既に事が成就したやうな、大らかな顔で窓の外を見た。

海沿ひの斷崖の上の道を、松林をぬふやうにしてバスは疾つてゐたが、この時急に木立が切れると、漂渺と打續くはてしもない太平洋が、まるで光りの扇をひろげたやうに窓の外いつばいに展開しはじめ、みな顔には急に明い光りが漲つた。

牛の眼はなぜ赤い

暖かな南をうけて海に面したこの地帯では、植物の成育も比較的早く、神部村ではもう麥刈りがはじまつてゐた。

壯年部、青年部、婦人部の三班をもつて組織された共同耕作部隊の人々によつて、まづ出征軍人遺家族の畑に、最初の奉仕の鎌は力強くうち下ろされてゐた。たわわに稔つた黄金の畑は、絶えまもなく吹きよせる海風をうけて豊かに波打ち、唄聲も明るく一齊に鎌を振る人びとの笠には、はつ夏の陽射しが惜しげもなくサンサンとふりそそいでゐた。それはひとつの、新らしい土の詩であつた。同

じ一つの目的のもとに統一されて、整然とうごく集團労働の力強い美しさであった。

青柳村の若者達は、土堤の上で握り飯の辨當を使ふと、喜惣の識合ひの農會指導員に案内されながら、その人びとの姿にうつとりと見とれるのだつた。

喜惣たちは神部村に着くと、豫め頼んであつた指導員に案内されて、この村のさまざまな施設を見て廻つた。共同農耕、砂糖、木炭、肥料飼料等の自給自足、生産から家計にいたる一切の計畫生活の實踐、軍需供出の共同労働、畜力の利用共同農具設置の強化、等々——これらのうちの大部分は、既に喜惣たちの努力によつて、青柳村でも着々と實踐にうつされてゐるものであつたが、けれど、小型製麵機を備へての主婦たちの共同うどん作りだとか、全村丸刈頭で翼賛しようとしてけられた公設の青年簡易理髮所だとか、收穫の日のよろこびを、老人達の獅子舞から、詩吟、舞踊、浪花節、さては自作自演の農村演劇等、適當の指導者によ

つて演出される一村總出の慰安日の設定だとか、まだまだこれから青柳村にとり入れたいやうな施設もいくつかあつた。

わけでも、農耕はもとより、漁業に紐摺に砂糖製造にと、村人たちが極度に畜力を利用して勞力不足を克服してゐる様子は、みな心の強い感動を持つて迫つて來た。

「私はこの、共同耕作部隊だとか、畜力の徹底した利用ぶりなどを、特によく青年團の人達に見て貰つて、青柳村のそれに一層の改善を加へ、さし迫つた農繁期を立派に切りぬけて貰はふと、それがまア、今日この人達に來て貰つた主な目的だつたんですがね」

畑に働いてゐる人びとの姿を見まもりながら、喜惣はさう志氣太へいひかけて、ふと思ひついたやうに、

「あゝさういへば、さつき説明されたこの村の慰安日のことで思ひ出したんです

が、娯樂といへば、あの富川の工場にも、工員たちが組織してゐる立派な吹奏樂團があるし、また富橋の製糸工場でも、こんど、東京の一流劇團で活躍してゐた優秀な指導者に依頼して、活潑に工場演劇をはじめたさうですよ。私達も、將來時間が出来たなら、是非さういふこともやつてみたいですね。——實際、私達働く田舎の者は、娯樂についても海綿のやうに新鮮な強い吸引力を持つてゐるんですから、そいつへ都會から締出しを喰つたやうな商品化した俗惡な漫才やレヱウ劇團を持ち込まれたんぢや、たまりませんよ。ねえ、倉松さん。失禮ですが、あなただつて芝居くらゐやれるでせう」

「え。芝居？……ウーム。そりや必要とあれば、な、なんだつてやらんことはいけどね……芝居といふと、忠臣藏かね？」「はは……まさかね」

喜惣が思はずわらつた時だつた。

突然、後ろの方の海に面した斷崖の上の小高い丘の向ふから、異様に古風な法

螺貝の音が、低く太くひきづるやうな響きを傳へながら、聞えはじめて來た。すると、これは又なんとしたことか、今まで畑で靜かに働いてゐた人々が、急に鎌を置き鍬を捨て、野武士のやうに勇ましい叫びをあげながら、海の方へ向つていつさんにかけて出しはじめたのだ。

二

いきなり仕事を投げ出して海の方へ駆始めた人々の姿に、志氣太が思はず眼をみはつてゐると、案内役の喜惣の友人が、笑ひながら云つた。

「あゝ、地曳がはじまるんですよ。いま法螺貝を鳴らしてゐるのは、このへんで（ほうべみ）と呼ぶ魚群の監視者ですがね。それが沖合の魚群をみつめて、人々に急いで合圖をしたわけですよ——ひとつ、海へ行つて見ませう」

娘たちも青年たちも、急にどつとばかり顔を輝かして駆出しはじめた。

喜惣の友人は、歩きながら志氣太へ話した。

「ご存じのやうに、このへんの村々は半農半漁でやつてゐるものですから、いつもあゝして（ほうべみ）が海を見張つてゐまして、魚群が陸に近づいて水面の色が變つて來ますと、こいつを（いろみ）と云つてゐますが、早速あゝして近所に働いてゐる村の人々に知らせるのですよ。なにしろ、魚をとるのも大事な食糧増産の一つですからね……」

海に面した斷崖のところには崖つ縁をかき削るやうにして峻しい急坂が切り開かれてゐたが、その坂道をまともに海風に吹かれながら下りて行くと、長々と打ちつゞく白砂の渚には、もう漁師に早替りした村人たちが、陽焼けのした逞しい半裸の體をキラ／＼と光らせながら、船出の仕度に忙がしかつた。

坂道の後ろの方からは、二頭の大きな牛が曳かれて來て、崖の裾のあたりへ繋がれた。

「あの牛は、どうするのですか？」

志氣太の問ひに、喜惣の友人は明るい聲で答へた。

「あゝ、あれが、さつきお話しした畜力利用の一つなんです。なにしろ人手が不足なものですから、あゝして牛にも手傳はして地曳網を曳かせるんです」

話してゐるうちにも、やがて仕度は出來上り、大きな網が積み込まれると、船はしぶきをあげて怒濤の中へ滑り込んで行つた。

たてがみのやうな白い飛沫をふり立てて挑みかかる磯波をどんと一氣に突切ると、禪ひとつに向ふ鉢巻の海の子たちは、櫂聲も勇ましく次々に寄せ來るうねりへ巧に乗りながら、沖へ沖へと漕ぎ出しはじめた。すると、斷崖の上では例の（ほうべみ）が、竹箆を左右に振りわけながら（右だ）（左だ）と船の者たちへ（いろみ）の位置の合圖を送り、かなりの沖まで乗出した船は、やがてその合圖に教へ導かれながら元の位置よりすつと右のはうへ移動しはじめた。

渚に立つてゐた人びとも、それに従つて長い砂濱を右のはうへあるいて行つた。志氣太や喜惣たちもその人たちに従つた。

遠く沖合は沸きたつ黒潮のしぶきに渺乎とかすみ、空には夏近い積亂雲がチカチカと光りの針をふくんでしみいるやうに白く輝いてゐた。海は、つはものを、潮風は遠い戦野を、志氣太の胸に描かした。

ふと、志氣太は立ちどまつた。

——青柳村の若者たちは、みんな村の人たちと一緒にあるいて來てゐるのに、氣づいてみれば、矢奈子の姿だけどこへ消えたのか眼につかない。

志氣太は、うしろを振りかへつて見た。

が、どこにも見えない。

すぐうしろのところ、断崖の袖が海のはうへ少しせり出し、砂濱もやゝ盛りあがつてゐて、いままで志氣太たちの立つてゐた元の渚も、いつのまにか見えな

くなつてゐる。

(いつたい、矢奈子はどうしたのだらう?)

——波の音がひとしほ高く、崖の上の木立では、松蟬の鳴聲が妙にかしましがつた……

三

面白くないのは、矢奈子だった。

けふくらゐ愉しく、そしてけふくらゐ面白くない日は、近ごろにない。まことにをかした目であつた。

——思へば、今朝、青柳村の停留所で、妙な飛入りの志氣太の顔を見たときいきなり覺えたあのふしぎな胸騒ぎは、虫が知らせたとしてもいふのであらうか。以來すつかりこじれてしまつて、はなはだ面白くない。おまけに、せつかくあの

やうにむさくるしい男たちから引きはなして、明るい青春の一日を持たしてやらうと味方に引きよせた仲間の娘たちも、海へ来るバスの中で、あの聞き苦しい長廣舌を志氣太がベチャベチャとはじめると、いつのまにかそのはうへ心を奪はれてしまつたりして……あゝ、なんて教養のないひとたちだらう！

とはいへ、彼女といへども、あの時の志氣太の話はピンからキリまで心の底に深く強く残つてゐる。——これはいつたいどういふことであらう。思へばこれも癪のタネだ！

しかもかてて加へて、はるばるバスでやつて来た神部村といふのが、サツパリ面白くない。青柳村と大して變り榮えもしない役場だの道だの畑だのばかりあるき廻つて、大事な海なぞ一向に見られない。やつと妙な法螺貝が鳴つてかうして海へかけつけた時には、もういゝ加減くたびれてしまつたではないか！

——なにもかも、面白くないことばかりだ。

けれども、それでゐて彼女の心の中には、なにか愉しく弾んだものが、絶えず漲つてゐた。まるで、強力な敵とちからいつぱい闘つてゐるやうな、このまゝでゐたらなにをいしてかすか判らないやうな、無闇といきいきした力だつた。

——もうかうなると、青柳村の仲間達なぞ、問題でない。そつちがその氣ならこつちもこの氣で、相手になぞしてやらないから！

で、みんなが沖の船について向ふへあるいて行つてしまつても、彼女だけはもとの渚に残つて、一人で砂の上を、怒つたやうな足どりで矢鱈とあるきまわつてゐた。

と、崖の裾の近くで、彼女はふと立止つた。

——ひとりぼつちの彼女と一緒に、こちらの渚へ残されてゐた二匹の生き物を見たからだ。

黒い大きな牛だつた。

崖の裾のあたりへ二つ三つ轉がつてゐる波に洗ひ晒されたやうな木の根株に、それぞれ太い綱でつながれてゐた二頭の牛は、彼女がその前まで来て立止ると、まつ赤に充血した大きな眼玉を鈍く動かして、うらめしさうな横眼でデロリと彼女のはうを見た。

彼女は急に、はじけるやうに笑ひ出した。

「まあ、あんた達、こんなところにゐたの！ おバカさんねえ。なぜみんなと一緒に行かなかつたの」

牛は長い涎を垂らしながら、口をムニャ／＼やり出した。

「まあ、きたない」

彼女は側に落ちてゐた細い竹の棒を拾つて、その涎を切つてやつた。涎は砂の上に着ちて、黒い丸いしみをつくつた。

「あゝ判つた。あんた達、あのをかした志氣太さんがゐるから、面白くないんで

しよ」

牛は再び赤い眼を鈍く動かして、横眼でうらめしさうに彼女を見た。

「まあ、なぜそんなかなしさうな赤い眼をしてるの？」

彼女は急に、なぜだかたまらなくいら／＼して来て、竹の先でポンと軽く牛の頭を叩いてやつた。

すると、この時 不意に恐ろしいことが起き上つた。

四

牛が、怒つたのである。

いきなり鼻をぶるんと鳴らして、鋭い角をふり立てながら、ダツとばかり躍り出したのだ。

矢奈子は、びつくりして飛びのいた。草の草履が砂にとられて脱げてしまつた

が、もうそれをはくひまもない。

怒った牛は、まさかと思つた大きな木の根株を、つながれた太い綱でグラ〜と引きずりながら、矢奈子へ向つて物凄いい力で駆け出したのだ。

彼女の顔は、サツとばかり紙のやうに青くなつた。あまりのことに聲もあげ得ず、たゞ夢中で逃げ出した。足袋はだしのまま、踏み込む熱い砂の上を、裾を亂して逃げ出した。

すると、牛はいよいよ怒りたけつて、恐ろしい角と大きな肩の骨を前のはうへ突き出すやうにしながら、根株をゴロ〜と後ろへ引きすつて、そのまた根株の跡を砂の上へグネ〜と残しながら、機關車のやうに猛然と突進しはじめた。

彼女もまた疾つた。疾つた。滅茶苦茶に疾つた。裾をはだけ、髪をおどろと振り亂し、ともすると足袋はだしの足を砂の中に取られさうにしながら、必死に疾つた。それは餘り、瀟洒な恰好ではなかつた。けれど、流石の彼女も、いまはそ

のやうなことを氣にしてはゐられない。救ひの叫びをあげることも出来ないくらゐに切迫した牛の鼻息をすぐ脊後に意識しながら、むさんに疾つた。

だが、あゝなんと、彼女の駆けて行くすぐ眼の前には、もう海が迫つて恐ろしい怒濤が寄らば呑まんとばかり、白い泡を嚙んで寄せ狂つてゐる。

彼女は急いで向きをかへた。そして再び崖の方へ向つて疾り出した。

だが、この頃からようやく彼女は、疲れを覺えた。息苦しくなつて眩ひさへ感じた。けれど、背後の牛はいよいよ猛り、眼の前には斷崖が壁のやうに迫つて來た。

たうたう彼女は、その崖の裾まで追詰められた。危く身をひるがへして、崖に沿つて横にかけ出しはしたものの、もうその足許はひどく亂れて今にも砂の上に仆れさうになつた。

と、その時。

急に猛り立つ牛の横手へバツと影のやうに躍り出した人影があつた。

——志氣太だつた。

いきなり牛の背後へ躍り込むと、ゴロ／＼引きづられて行く木の根株へ飛びつきざま、そいつの持つてゐる惰性へ満身の力を添へて、すぐそばの崖の裾に添つて何本も並び突き出てゐるはたぐひの群れの方へ、エイとばかり轉げよせた。すると根株ははたぐひの間へひつかかり、綱はびんと張つて流石の牛もつひにびたりと喰ひ止められた。

志氣太は手を拂ひながら、危く牛の鼻先きで助かつた矢奈子へ云つた。

「もういゝです。もう大丈夫。さア向ふへ行きませう」

矢奈子は血の氣の失せた顔で大きく肩を喘がせながら、急いで亂れた髪を押へ崩れたもすそをとりつくろつてゐたが、志氣太にさう聲をかけられると、急に今までにない美しい顔を見せた。

といつても、なにも、なよなよとしはらしく頭を下げて、禮をのべたりしたわけではない。

いやそれどころか、禮などは決してのべず、いとも憎々しげな視線で志氣太の顔をキラリと睨むと、そのまゝ黙つて、志氣太の眼の前の砂の上を、足袋はだしの妙な恰好でサツサと横切り、向ふの、前に牛のつながれてゐた場所の方へ、草履を拾ひに歩いて行つた。

五

それを見てゐたものは、一人もなかつた。

志氣太と矢奈子の當事者以外には、その素晴らしい活劇のありさまを知つてゐるものは、一人もなかつた。

矢奈子が、怒つたやうな顔をしたまゝサツサと草履をさがしに行き、志氣太が

軽く額に浮んだ汗をぬぐひながら、もうケロリと何事もなかつたやうな顔つきで元の渚のはうへ歩きはじめた頃、やつと一人の村人が現れた。

村びとは、牛の頭の位置が變つてゐるのに、ちよつと首をかしげてゐる様子であつたが、けれど、さして深くあやしみもせず、やがてその網を解くと、ほかのもう一頭と一緒に連れて、志氣太のはうへ戻つて行つた。

そこではもう、地曳きがはじまるころであつた。

沖の船からは既に網が海中に投げ込まれ、魚群を包圍するやうに輪を描き乍ら岸へ向つて漕ぎよせて來るところだつた。

濱には、急に活氣が漲つた。二頭の牛は早くも波打際まで引出され、人びとと一緒に、曳網を持つて來る船を待ち構へた。

やがて船は來た。網は牛につけられた。人も牛も、打ち寄せる波のしぶきを浴びながら、地曳網を曳きはじめた。

矢奈子も、いつのまにかやつて來て、そのいさましいありさまを見てゐた。志氣太たちとは反對のはうに立つて、見とれてゐた。まるで何事もなかつたやうな顔であつた。

この、何事もなかつたやうな矢奈子の表情といふものは、實に驚歎すべき表情であつた。

むろん志氣太は、男であり、しかも少し變つた人物のことであるから、あのやうなことを人に喋つたり、またいつまでもそれにこだわつたりするやうなことはなく、もうケロリと忘れてゐたとしても不思議はない。けれど、女であり、しかもたつたいま、あやふい命を助けて貰つたばかりの矢奈子が、その恩人の前で、しかもまだ、たつたひとくちの禮もいはない、その恩人の前で、まるでなにごともなかつたかのやうな平然たる顔つきで、いやむしろ、さも愉しげな微笑をさへ浮べながら、いさましい地曳網の光景にみとれてゐるといふこのありさまは、こ

れはいつたいどうしたといふことであらう？——おそらく、お釋迦さまといへども、ちよつと理解に苦しまれるに違ひない。

まつたく、その矢奈子の、志氣太のはうなぞ恬としてかへりみず、さも無心に網を曳く人びとの姿に見入つてゐる平然たる顔つきといふものは、不敵なぞといふところは通り越して、妖しいまでに美しくさへあつた。

斜前から絶えず涼しい風に吹かれてゐる髪といひ、もすそといひ、もうそこには、さつきのあのとり亂したかげといふものは微塵も見られなかつた。あの足袋はだしの妙な恰好で、ブンとしたまゝ志氣太のまへを横切り、凸凹した砂の上をあるいて草履を拾ひに行つたときのあのをかきな恰好さへも、いまはもう嘘しか思はれないほどの、颯爽とした立ち姿であつた。

しかも、それでゐて、彼女が牛に追ッ駆けられて恐ろしい危険に瀕したことは事實であり、尙また、その恐ろしい危険からあやふく志氣太の手によつて助けら

れたといふことも、誰も見てはゐなかつたが、これまた嚴然たる事實に違ひなかつたのだ。

にもかかはず、彼女はひとくちも禮をいはない。頭も下げない。いやそれどころか、もうそんなことはケロリと忘れた顔つきで、しやあしあとすましかへてるのである。

六

やがて、地引網は終つた。

人びとや牛どもの勞苦は酬ひられ、豊漁であつた。

青柳村の一行は、それをしほに神部村をひきあげることにして勢揃ひすると、村人たちに厚く禮をのべて、歸路についた。

歸りは、來たときと道を違へて、半島の北側にある多原の町を廻つて、電車で

富橋まで歸ることになった。

多原の町へ出るには、こゝからバスで、一旦隣りの青羽根村まで行き、そこから更にバスで半島を横断しなければならない。

一行は、やがてバスへ乗った。

こんどは、坐席の都合で、娘達は右側へ、男達はその向側へと、顔を並べて腰を降ろした。

ところが、廣い濱邊などとは違つて、狭いバスの中のことであるから、いくら離れてゐるといつても、志氣太と矢奈子の位置もほとんど眼と鼻の間にあり、勢ひ顔もなにげなく一二度はかち合はせたのであるが、しかもなほ、矢奈子の顔には微塵の動搖も浮ばない。至極平然と取りすました顔であつた。

この平然たる顔つきをチャリとなにげなく見た時に、流石の志氣太も、ふとあのことを思ひ出した。そしてまだ矢奈子がひとくちも禮をいはないことを思ひ、

ちよつと妙な娘だと思つた。けれども、すぐに或るひとつの解釋を得て、思はず彼は苦笑した。

その解釋といふのは、

——矢奈子は決して愚かな娘ではないから、あのやうに、女が或る危険から男の手によつて助けられたといふやうな場合、えてしてその後には生じやすい平凡愚劣な結末といふものに用心深い反撥を覚えて、それであるやうに平然として一件を握り潰さうとしてゐるのだな……

とまあ、志氣太は考へたのだ。

この解釋は、女の氣持の診察などといふことにかけては、とんと名醫でない志氣太としては、意外に上出來のはうであるが、けれどこれとしてしよせん志氣太だけの解釋であつて、矢奈子のほんたうの氣持といふものは、残念ながらどこにあるのか判らない。

いづれにしても、兎に角志氣太は、さう一應の解釋をつけると、それでもうそのことはすっかり忘れてしまつて、來た時と同じやうに、再び喜惣となにやら話に夢中になりはじめた。

ところで、矢奈子のはうは、相變らず平然としてゐて、いつまでたつても、どんな機會があつても、お禮はおろか目禮さへしない。間もなくバスが多原の町へ着いて、みんな揃つて町をあるき出しても、それから喜惣の發言で、この町にある渡邊華山先生の墓にお参りするときになつても、尙またそれをすまして富橋へ向ふ電車へ乗つてからでも、富橋へ着いてからでも、いや、ついに青柳村へ歸つてからでも、不敵といはふか鐵面皮といはふか、たうとう片言隻句も志氣太へ挨拶をしなかつたのである。

つんとすましてひらりと皆から別れると、そのまゝ平然と邸へ歸り、門をくゞつて玄関を抜け、廊下を通つて離れの自室へサツサと戻つて來たのであるが、と

ころが部屋へはいてピシヤリと障子をたて切ると、この時はじめて彼女の態度に變化が起つた。

時はまさにはつ夏、決して寒くはなかつたのであるが、部屋へはいつてピシヤリと障子をたて切ると、そのまゝ彼女は小机の前にガバとばかり俯伏してしまつたのだ。

そのまゝ、いつまでも動かない。

女中が一度廊下の外までやつて來たが、それでも動かない。かすかに肩先をふるはしながら、二十分、三十分、やがてあたりに夕闇が迫る頃になつて、靜かに彼女は顔をあげた。

——あのとときの牛のやうな、赤い眼をしながら……。

村いちばんの愛郷者

—

村道を一人の異様な男があるいて来る。

立派な甲號の國民服に大兵な體をはち切れさうに包み、なにか憤慨にたえないことでもあるのか、ゆでたての蛸坊主のやうな頭をふり立てふり立て、やゝ前のめりになつてグイグイと村道があるいて来る。

——その名を洲崎蒔太郎といふ、青柳村の村會議員の一人であつた。

洲崎といへば、記憶のよい讀者は思ひ出されるであらう。いつぞや稻垣矢奈子が、自分の部屋の窓から、庭の利久燈籠の火ブクロ越しに、チラリと見たことの

あるあの男——母屋の座敷で彼女の父の兵衛と對坐して、なにやら、村の發展のために大いに工場でも持つて來なければいけん、といふやうなことを話し合つてゐた、あの、村會議員の洲崎なのである。

彼は（尤も今日は少し機嫌が悪いやうであるが）近頃たいへん上機嫌なのである。といふのは、こないだ實施された村會議員の改選で、かなりの苦戦の後に見事當選し、再び議席を獲得することが出來たからであつた。

こんどの村會議員の選挙は、青柳村はじまつて以來の劃期的な新選挙で、當選した新議員の中には、むろん前議員の立派な人物も含まれてはゐるけれど、一面新人の進出が壓倒的にいちぢるしく、曾て定森喜惣たちが期待してゐたやうな清新潑瀾たる立派な村會が出來上つたわけであるけれども、その中でたつた一人だけ喜惣たちにはすれば長蛇を逸した感のあるのが、この洲崎蒔太郎氏であつた。

洲崎蒔太郎の家は青柳村で一流の雜貨店であつて、といつても青柳村には雜貨

商は一軒しかないのであるから、一流も二流もないわけであるが、兎に角その店の彼は主人公であつて、田地などもいくらかは持つてをり、村會議員で、農會の役員、實行組合の役員、産業組合の役員、警防團の役員、學務委員、土木委員——といった風にありとあらゆる團體の役員であり、おまけに村一番の酒豪で腕力もあるといふのであるから村内での威勢もなかなかよく、わけても役場吏員などは、彼がドカ／＼と出現すると妙に鳴りをひそめて小さくなつてしまふといったいの、老人の村長や助役ですらも彼には一目をいてゐようといふ人物なのであつた。

で、序にこの先生の、武勇傳を一つ紹介してをくと——

或る時、學校で學務委員會が開かれた際、會がをはつて數名の洲崎を中心とする委員たちが校長先生を連れて村でたつた一軒の料亭へあがり、慰勞の酒宴を開いたのであるが、さんざん杯盤狼籍を重ねて善良な校長さんをハラ／＼さしたあげ

く、最後に洲崎は、太い腕をニュツと校長さんの眼の前へ突き出すやうにしながら、その宴會の費用を校長先生に押しつけてしまつたといふ、恐るべき豪傑なのであつた。

尤もこれなどはほんの一例であつて、まだ／＼このほかにも、聞くだに手に汗を握るやうな武勇傳はクサるほどあるのであるが、過去になづます、どうやら最近ではだいが改まつて來たやうであるから、今日はまづ、一應の紹介のみにとどめてをくとして——

ところで、このやうな武勇傳の持主である洲崎落太郎氏が、この新時代の青柳村會に、どうしてまた、再び名をつらねることが出來たのか、といふと、實はこれには、ひとつの重大な理由があるのであつた。

洲崎藤太郎氏は、この青柳村でもいちばんの、最も熱烈なる愛郷者である。とすくなくとも自分では堅くさう信じてゐる。いや自分一人で信じてゐるばかりではない。村人たちの大多数もそのことは認めてゐる。事實また彼は村のためにいろいろな仕事をして來てゐる。耕地整理の問題だとか、灌漑用水路の改修だとか（尤もこれらの事業はほとんど掛聲ばかりで、まだ完成の域にまで達してゐないが）それから自分の住んでゐる区内の公會堂の建設だとか、その公會堂へかける額を或る名士に書いて貰ふために旅行をするだとか、そして目下は、この青柳村を急轉する時局に即應して、一段と發展させるために、なにか時局産業の工場を誘致しようと計畫しはじめてゐる、等々。

凡てこれらはその時々の行き當りバツタリ主義で、一貫した計畫性には缺けてゐるけれど、兎に角いろいろと村のために熱心に盡してゐるのであつて、同時にまたその熱心さにも劣らぬ熱心さを以て自分の抱負を宣傳するために、村人た

ちも、特に中年以上の年とつた人々からは、一面譽燈されながらも他面すくなくならぬ期待をかけられてゐるといふ妙な人物であつた。で、この熱烈なる（愛郷者）であるといふことが、彼の過去における數々の武勇傳にもかゝはらず、彼をして今度の新選舉にも敢て當選せしめてしまつたといふ、有力なる原因の一つと見ることが出来るであらう。

兎もあれ、彼はそのやうにして再び村會議員の榮譽をになふと、一段と張切つてしまつた。わけでも、つい數日前に行はれた初村會などでは、大多数の議員が新人で、議事の進行などにはまるで素人であるに引きかへ、前良なる前議員の中でも特に百戰錬磨の闘將であつた彼は、己れの眞價を見せるはこゝぞとばかり、別に大した内容があつたわけではなかつたけれど、

「議長、何番發言！」

などとしきりに繰返しては活潑なる發言ぶりを見せ、早くも穩かな議場の人氣

を一手に掌握、リードするかの形勢をさへ見せはじめて、大いに面目をほどこしたといふ次第であつた。

さて、そのやうに近頃洲崎落太郎氏はすつかり張切つてしまひ、村一番の、最も熱烈なる愛郷者といふことに自他ともに認め認められて、いよいよ元氣で青柳村の發展のため挺身活動をはじめつゝあるのであつたが、その洲崎落太郎氏が、けふはまたなんとしたことか、ひどく不機嫌な顔つきで帽子もかぶらず、ゆでたての蛸坊主のやうなツルリとした眞赤な頭をふり立て、セカ／＼と村道を急ぎ足にあるいて行くであつた。

——やがて彼は、稻垣邸のある高臺の裏手の藪を通り抜けて、倉松醫院の前までやつて來た。

細葉の生垣の前あたりからやや歩調を落して、隠しからとり出した手拭で額や鼻筋の汗を拭き／＼門の前までやつて來ると

「むゝ」

と呻くやうな聲をあげながら始めて立ちどまり、

(こゝだな)

いはぬばかりの眼つきで、ジロリと門の中を睨みつけた。

(仁天堂、倉松醫院)

と書かれた例の古風な看板のかかつてゐるその門の一方の柱には、

(青柳村圖書館)

の看板の隣りに、

(青柳村衛生相談所)

と、これはまた更に眞新らしい看板が、圖書館の看板と同じやうに、龍樹先生に頼んで書いて貰つたものであらう、達筆の墨痕も鮮やかにかゝげられてをり、正面玄関の前には、數十名の國民學校の生徒が、女の先生の指圖を受けてズラリ

と整理してゐるところであつた。

洲崎藤太郎は、肩をいからして門の中へはいて行つた。

三

「川合三郎さん」

「ハイ」

「大林正夫さん」

「ハイ」

「近藤喜一さん」

「ハイ」

養護主任の女の先生に、次々に名前を呼ばれた子供たちは、元氣な聲で返事をしながら玄関をあがると、上着を待合へ脱ぎ捨て、順序よく並んで診察室へはい

つていった。

診察室では千尋が手馴れた聲で、はいつて来た子供たちの名前をもう一度呼びあげ、カードに書いてある名前と照合すると、子供の二の腕の内側をアルコールで拭いては、志氣太の方へやさしく押し進めた。

志氣太は時々子供たちに冗談口を聞きながら、次々に消毒された皮膚の表面に細い注射針の先だけを軽く刺しては、ツベルクリン液を注射して行く。

大して痛くもないとみえ。子供たちは口のあたりを一寸しかめるだけで、あとは却つて珍らしく面白いのかガヤ／＼とお喋りしたり笑つたりしてゐる。

「静かにしなければいけませんね」

養護主任の先生もはいつてきて、子供たちをたしなめながら千尋のそばで手傳ひはじめ。

やがて一日分の人數の注射が終ると、今度は三日前に注射をうけた子供たちが

同じやうに裸になつて呼びこまれ、反應の檢診がはじめられる。たいていの子供は反應陰性者であつたが、中にはシャツのボタンぐらゐの發赤をみせた陽性者もあつた。千尋は志氣太の指圖に従つて、檢診の結果をテキパキとカードへ記録して行く。

——靜かな午後であつた。

もうこれで、この仕事にとりかゝつてから十日になる。毎日放課後に、先生がその日の子供をまとめては、引率してきてくれることになつてゐる。で、志氣太はなるべく往診の時間をうまくやりくりしては、この時間を家にゐるやうにして働いた。

忙がしいのは千尋であつた。今までは毎日午後の時間を僅の残務を除いては、ほとんど志氣太の母の相手や自分のことや、それから圖書館のことなどに費してゐた彼女であつたが、この仕事をはじめられてからは一度に忙がしくなつた。

けれども彼女は、忙がしければ忙がしいほど愉しかつた。わけでも子供たちの世話などしてゐると、心は一層明るくなつて、生き生きとした氣持で働くことが出来た。もともと彼女は、一般の患者たちからも氣受けがよく、馴染の患者などからは窓口を通じて「ちいさま」だとか「ちいさん」などと、倉松家の人たちと同じ調子で親しまれるやうな娘であつたから、學校の子供たちからも忽ち引率の先生にも負けなくらゐに馴つかれてしまつて、それがまた彼女の働く心を一段と明るくさしてくれるのであつた。

「ごめん下さい。若先生はお出でるかね？ 若先生は」

突然、玄關の方から人の訪ふ氣配がして、志氣太の聲にも劣らぬやうな大きな聲が、聞えて來た。

千尋はすぐにペンを置いて立つて行つたが、間もなく戻つて來ると、

「あの、洲崎さん——がいらつしやいましたけど」

「洲崎？」

「え、雑貨屋さんの」

「あ、あの村會議員氏か。で、用件は？」

「是非お目にかかりたいとかで……」

志氣太は子供の二の腕を軽く握みながら、一寸顔をしかめたが、すぐにいった。

「仕方がない。ここへ通つて貰はう」

間もなく、千尋に伴はれて、例の洲崎落太郎氏が、ドカ／＼と室内へはいつて来た。

四

「先生。無茶をやつてくれちやア困りますねえ」

診察室へはいつて来た洲崎落太郎氏は、いきなり怒氣を含んだ大聲で、浴びせ

かけるやうに志氣太へかういつた。

「いつたい、なんのことですか？……まア、そこへお掛けになつて下さい」

志氣太は子供から手をはなして、傍らの椅子を指した。洲崎はチラリとそのはうを一瞥しただけで、すぐに志氣太のはうへ向きなほると、

「いや、わしは急ぐからさうしてはをられん。——時に、あんたはいつたい、なんの證據があつて、わしとこの娘を肺病にしてしまったのかな？」

「あなたの娘さんを、肺病に？」

「さうだよ。まだ學校にゐるやうな小さな子供をとらへて、無理に、ツ、ツ、ツ、ツ、エツペリン注射だのなんだのをやらして、勝手に肺病にさしてしまつて、あげくのはてに富橋の醫者へ連れて行つてエツキス光線にかけさせるのなんだのと、無茶もええ加減にしといってもらはんと困りますぜ」

「あ、それですか」

志氣太は微笑しながら引きとつた。

「それでしたら、まあそんなにムキにならないで下さい。なにも私は、あなたの娘さんが肺病だなどとは、まだ決して申し上げはしなかつた筈です。このあひだも常會の席上で申上げた通り、尤もあの晩、あなたは御出席されなかつたかも知れませんが、このツベルクリン注射といふ奴は、いままでに結核菌の感染を受けたことがあるかどうかを調べるだけでして、その結果あなたの娘さんが陽性の反応を見せたからとて、決していま結核の發病をしてゐるといふわけではなく、陽性の人の中にはほんの少しばかり今發病してゐる人と、それから、一度結核菌の浸入は受けたけれど見事に撃退してしまつた大部分の健康者とがまじつてゐるわけにして、そのどちらに屬するかといふことを確實に調べるには、どうしてもレントゲン線の——」

「いや、わしはそんなややこしいことを訊きに來たではありません」

と洲崎落太郎はいよいよムキになつて、

「だいたいわしとこはさういふ病氣の筋ではありませんで、はじめからそんなことを無理に調べて貰ふ必要はないのですわい。わしにも、家内にも、それからわしとこの先祖代々にも、一人として肺病のハの字にさへかかつた者はないのでして、さういふ立派な血統へわざわざケチをつけられて、とんでもない肺病筋やなんぞにされちまつたら、去年富橋の女學校を出た上の娘の嫁入りにも差しつかへますわい。あのツ、ツエツベリン注射の陽性とやらいふのは、取消して貰ひたい。エツキス光線へかけるなどといふのは眞平お断りする！」

志氣太は思はず顔をしかめた。

「いや。そいつは取消すわけにはいきませんね」

「取消すわけにいかない？」

「さうです。あなたの、肺病に對するさういふ間違つた考へをこそ、取消して——」

「よろしい。あんたがそれを取消することが出来んといはれるなら、わしは、もつと話のわかるほかの醫者へ行つて、取消して貰ひませう」
と早くも背を向けるのへ、思はず志氣太は腰を浮かせて、
「待つて下さい。どこの醫者へ行かうと勝手ですが、あなたのその間違つた考へだけは直して貰はんと——」

けれども洲崎落太郎氏は、もう志氣太の言葉などには耳もかさず、大へんな御機嫌でサツサと表へ出て行つてしまつた。すると志氣太もムキになつて、子供たちを待たしたまふ、診察室を飛出すと、洲崎のあとを追跡しはじめた。

五

玄關で誰れの下駄ともわからぬ下駄を靴下の足へひっかけて飛び出した志氣太

は、三步もあるかぬうちに石につまづいて下駄の鼻緒を切つてしまふと、わあと妙な叫びをあげてちんばを曳きながら脊脱ぎまで引き返し、今度は臙脂色の鼻緒のついた千尋の下駄をつつかけて再び表へ飛び出した。

けれども志氣太が門の外へ出た時には、もう洲崎落太郎氏はどこへ行つてしまつたか、いくら探してもその姿はみえなかつた。

志氣太はくやしさに舌打ちすると、肩を落して下駄をぞろぞろ曳きぶりながら引き返へして來た。

診察室では、さつきまで小さくなつてゐた養護主任の女の先生が、千尋と二人でなにやらヒソ／＼話してゐたが、志氣太が戻つて來るとホツとしたやうに氣をとりにほして、子供の世話をしはじめた。

「學校のはうへも、ほかの父兄のかたで、同じやうなことをいつて來られたかたがおありですつて」

千尋がいつた。

「なに、ほかにもあるつて？ うーム。どうもこの村の人達の衛生知識の低いにはおどろいたねえ」

志氣太はさう答へながらも、そのくせ一向に驚きもしないやうな平氣な顔つきで、永い間待たしてをいた子供の腕を、すまなさそうに軽くとりあげ、検診を續けはじめた。

養護主任が、不安さうな聲でオドオドと志氣太へいつた。

「あのそればかりではござるませんわ。——實はあの洲崎さんは、今朝學校のはうへもおいでになつて、校長先生へ、なんでも、この注射劑の實費を校費の衛生費の中で流用したことについて、學務委員の自分になぜ相談をしなかつたかつてずるぶん厭がらせを云つてをられましたわ」

「ほう。それはまたバカな話だね、この實費のことは、前以つて立派に村長のは

うへは諒解を得てゐられることだし、それに、費目流用は認められゐるんだからね」

「えゝ。ですけど、こんどの校長先生は、御存知のやうに生真面目なかたで、そのへんを如才なく立廻られるといふやうなことはなさいませんので、それでまあそんなふうに厭味をいはれたんぢやないかと思ひますけど」

「ふム。饅頭でも買つて、盛大に學務委員會を開らなかつたのが、氣に入らないのかな。尤も、いまだきそんな事を考へるのは、あの先生だけだらうがね」

「先生。饅頭なぞいまぢやどつこにも賣つとりません」

後ろのはうで、元氣な子供の聲がした。

「うわあ。さうだつたな。こいつはまゐつた……よろしい。さア、次」

「あの、それはさうと、洲崎さんの娘さんは、どうしませうか？」
養護主任が、心配さうにいつた。

「明日の土曜に、レントゲン組を連れて行く豫定ですけど」

「その娘は、別に異状はなかつたかね？」

「はア、咳も熱もありませんし、寝汗も出ないやうで、いまのところは元氣ですけど」

「ちやア、その娘だけ もう少しあと廻しにして下さい。なにしろあゝ頑固ぢやア仕方がない。そのうち折を見て私から説きふせますから……いや。まア貴女がたは心配なさらずに、どし／＼仕事を進めて下さい。全責任は私が持ちますからね」

志氣太はさういつて、次々に子供の腕をとつて行つた。その言葉はなんとなく悲壯な調子を帯びてゐたけれど、顔つきは一向に悲壯らしくもなかつた。

街 に て

埃りつばい縣道のうへにヂリヂリと照りつけてゐる陽射しは暑かつたけれど、苗代のあたまをそよがせて遠くから渡つて来る風は涼しくこころよかつた。

堀りおこされて水を引かれた田圃の中では、トノサマガヘルやババガヘルがポチャン／＼と軽い水音を立てては跳ねまわつてゐた。

志氣太は自轉車のペダルを踏みながら、富橋の街のはうへ疾つてゐた。

けふはちやうど日曜日で、學校の子供が來ないために、午後の往診をすますと図書館用の新刊書でも漁つてみようとして、そのまゝ富橋の街へ出ることにしたので

あつた。

図書館といへば、このはうも、ようやくこの頃になつて、少しづつ眼鼻がつきはじめて來た。

開館當初は、讀者も既にご存知の通り、利用者はぜんぜんなく、ただ、汽車や電車や飛行機のついた科學書の寫真だけを見に來る隣りの芳坊と、それから、別に辭令は貰はなかつたけれど（青柳村圖書館）の司書に兼任を命じられた千尋との二人だけが、毎日欠かさぬ熱心な讀者になつてくれただけだつた。變化はまづこの千尋の上から起きはじめた。

一人も客のない圖書館の館長に對する、多分の義理と思ひやりから、いつかうに面白くもない讀書をムリにもつづけてゐた千尋だつたが、そのうちに、どういふものか、本を讀むことがそれほど苦痛でなくなつて來た。どうして、いつのまに、このやうに變つて來たのか、そのことに不審を持つことさへなかつたほどの

自然の變化であつた。そして更に、さうしてあれこれと讀んでゐるうちに、やがて今度は、毎日少しづつの時間でも、書物に向ふことに、いつかしらそこはかたない愉しさをさへ覺えるやうになつて來たのだ。自分の讀書についての一定の軌道と、正しい興味とを、知らず識らず持つやうになつたのであらう。いまでは、どうかすると、患者の來たのもうつかり知らずに、藥局の机で讀みふけてゐたりするやうなこともあつた。それらの本は、例へば、熱帯病との鬭争に一生を捧げた或る醫師の記録だとか、夫と協力して大きな仕事をなした物理學者の妻の話だとか、癩院にたたかふ女醫の手記だとか、それから、これは、志氣太には固く秘してゐたけれど、或る權威ある人の著作になる、結婚と愛情に關する書物だとか、等々であつた。

千尋が、讀書に對する興味を覺えはじめた同じ頃から、一人も客のなかつた圖書館にも、ポツポツと變化が見えはじめた。役場から村ぢうに發送する廻狀に、定

森喜惣がなんども書き立ててくれた宣傳が効を奏してか、いつからとなく二人三人と讀者も出來はじめ、いまではどうやら、十冊あまりの貸出しを見せてゐるといふ盛況？であつた。讀者の大部分は若い人ばかりであつたけれど、志氣太にいはすれば、讀書の範圍はなかなか廣く、着實で、最初の豫定通り活潑に新刊の補給もしなければならぬ形勢をさへ、見せはじめてゐるのだつた。

氣をよくしたのは、志氣太であつた。かうして街の本屋へ通ふにつけても、しぜんとペダルを踏む足にも力があるものであつた。一本道の縣道を、志氣太はグイ／＼と自轉車をはしらせた。

自轉車といへば、このはうも、いまではなかなかうまくなつて來た。はしりながら横を向いて、畑にはたらいでゐる村びとたちの挨拶にこたへることなどいふもおろか、向ひ風のと きなど、片手をハンドルからはなして、あやふく吹き飛びさうになつた帽子を、押へながらはしるといふやうな藝當も、いまでは平氣で出來

るやうになつて來た。

畑の中に立ちならんだ高壓線の電柱が、だんだん密度を増して、富橋の街に近づいた時だつた。

道の向ふのはうから、大勢の自轉車に乗つた人の群れが、狭い縣道にあふれるやうに黒くなつて、現れはじめた。けれども志氣太は、自信を持つた乗りぶりである。そのおほぜいの群れのはうへ突きすすんで行つた。

二

みるみる自轉車に乗つた人の群れは大きくなつて、志氣太のはうへ迫り寄つて來た。そして、あつといふまに、志氣太の自轉車はその群れの中へ突入して、志氣太の右を、左を、眼の廻るやうな速さで、何臺もの自轉車がすれ違ひはじめた。

それは、日曜日といふのに、何百といふ女學生達の群れであつた。たぶん、勤

勞奉仕かなにかに出ての歸りであらう、みんな、用具を持たない軽やかな装ひだつた。

はしりながらも、志氣太が思はず眼をみはつてゐると、とつぜん、すぐ前で、ヂヂヂヂ……とはげしくベルがなつた。いそいでハンドルに力をいれる。と、こんどは、右の前のほうで、ヂヂヂヂ……と鳴つた。あわててハンドルをひねる。と、こんどは左の前方で、ヂヂヂヂ……つづいて、その向ふでヂヂヂヂ……更に右で、左で、前で、うしろで、ヂヂヂヂ……ヂヂヂヂ……ヂヂヂヂ……

志氣太は、たつたいままで持つてゐた自転車についての自信を、瞬時にして失つた。あやふく田圃の中へ滑り込みさうにして、青くなりながら自転車を下りると、それを持つて道の隅に立ちどまつたまゝ、やゝあきれた顔つきで、すぐ眼の前を矢のやうに流れつづける、夥しい自転車の群れを見送るのだつた。

なにやら聲高な話聲と、明るい笑ひ聲を、最後の一團からちぎつて投げるやう

に殘しながら、やがてその女學生の群れは、志氣太の前をはしり去つた。が、志氣太はしばらくそのままで、風のやうに過ぎ去つて行く一團のうしろ姿を見送つてゐた。

(なんといふ達者な娘たちだらう)

おもはず志氣太は、つぶやいた。そして、思つた。

——まつたく、達者といへば、このへんの娘達くらゐ、自転車を手軽にあつかふ娘達はない。といふよりも、志氣太の郷土のこの地方くらゐ、女の自転車乗りの盛んな土地はない。子供の頃には、そんなことには氣もつかなかつたけれど、いま思へば、なにも女學生ばかりではない。商家の娘でも、工場に通ふ娘でも、百姓の娘でも、事務をとる娘でも、いや、娘に限らず、女の先生でもお嫁さんでも、おかみさんでも、お婆さんでさへも、洋服であらうと和服であらうと、じつに手軽に女たちは自転車をあやつつて、町を、村を、はしりまわるのである。

志氣太は、いまさらのやうにそのことに氣づいて、感歎の首をひねつた。

——尤も、手軽に自轉車を扱ふ女といへば、東京にゐた頃、よく山の手方面の静かな朝の街角などで、クリーム色のペンキを塗つた、競争用のそれみたいな輕快な車體の自轉車に、ヒラリとまたがった花のやうな少女が、短い髪を朝風になびかせながら、ハイカラな散歩をしてゐるのなどをよく見かけたりして、それまで女の自轉車乗りといへば、みぐるしいものだとはかり思つてゐた志氣太の認識をやゝ改めさせたものであつたが、けれども、いまかうして、ふるさとの女達の實用向きな自轉車乗りを思ひながらも、ふと志氣太は、その中に、東京の街を自轉車に乗つて散歩する娘のやうな、形の上でのハイカラな輕快さはなつたけれど、働く郷土の女達が、自轉車をまるで下駄みたいに、意識せず無造作に履きあるくところに、それをシンから自分のものにしきつた眼に見えない一層の氣輕さを感じとることが出來て、

(うム、これはなかなかたのもしいぞ)

と、おもはず、満足のゑみを洩らすのだつた。

——やがて、志氣太は、富橋の街へやつて來た。

行きつけの文敬堂といふ書店で、兒童向きのものなぞもまぜた十冊ばかりの新刊を注文すると、そのまゝ自轉車をひつぱりながら、久しぶりの富橋の街をあるきはじめた。

街には、もう夏の姿が氾濫してゐた。間もなく志氣太の前には、この街でたつたひとつの高層建築である(産銀ビル)が現れはじめた。尤も、このほかにも富橋には、四階建の百貨店もあるし、立派な公會堂もあるし、東京風の映畫館もあるし、富橋銀座もあるし、美容院も、洋裁店も、女の子のおしるこやも……志氣太はふと、アメリカの都市はヨーロッパの都市と違つて、どこの地方へ行つても大小の差こそあれ、中央と同じ道具立てが揃つてゐて、中央の模倣で、デモクラ

シの國でありながら、特徴のある都市はほとんどない、と皮肉つた或る有名な外交官の言葉を、微笑と共に思ひ浮べながら、やがて産銀ビルの前までさしかかった。

すると、ちやうどその時。

ビルの通用口から、和服姿の一人の美しい女性が出て来たが、ふと志氣太を見かけてびつくりしたやうに立ちどまると、

「あら。志氣太さんではござるません？」
なつかしさうに聲をかけた。

三

年の頃二十七八の、小さな風呂敷包みを片手にかゝへた、職業を持つ女らしい姿であつたけれど、とつさのこととして志氣太が立ちどまつたまゝぼんやりしてゐ

ると、女は寄添つて来て、

「三保でござるます。お見忘れになりました？」
といった。

「あゝ、三保さんか！」

思はず叫びながらも、志氣太はまじまじと女の顔を見つめた。

——三保であつた。志氣太のたつた一人の幼馴染である。酒屋の娘の三保であつた。あの桑畑の中で、二人して桑苎をめちやくちやにちぎつては食べながら、くちびるを果汁でまつ赤に染めてキャツキャところげまわつたことのある、あの三保であつた。

「いやアこれは珍らしい。すつかり見違へてしまつて」

志氣太は、われにもなく顔をほてらせながら、女の姿をしげしげとうち眺めた。
「いま、富橋にゐるの？」

「ええ」

「お勤めかね？」

三保はうしろのビルのほうを軽く振り返りながら、

「産銀會社に勤めてゐますわ……あの、御無沙汰してますけど、お宅のみなさまお變りござるませんか？」

「ありがたう。君の家は？」

「ええ、相變らずですわ」

三保は、まつげを伏せた。追憶を辿るやうなしみじみとした伏せかたであつた。

志氣太は、三保が、一度結婚に失敗した女であることを思ひ出した。

「お茶でも呑まないかね」

「ええ。でも、おさしつかへござるませんか？」

「あゝ、僕はもう、歸るだけだから」

二人は並んで、道を引返すやうにしてあるき出した。

歩きながらも、ふと志氣太は、不思議な情緒を軽く感じた。

それは、子供の頃に好きであつたこの三保との、あの桑畑の中での思ひ出が中心になつて、そこからモヤ／＼と湧き出してくる一種得體の知れない情緒であるらしかつた。いまひよつこり出會つて、一緒に並んで歩いてゐる三保の顔や姿やそれからこの女が、今ここにかうしてあるまでにさまざまと經て來たであらうやうな來歴などは、全然かけ離れた無關係のものであるけれども、しかもなほそれである、この女に出會つたために一段とあざやかに浮き上つて來たといつたていのふしぎな情緒であつた。

二人は間もなく、一軒の喫茶店へはいつた。

古梅園といふ奈良の墨屋みたいな名前の店であつたけれど、軍人でも教師でも家族づれでも氣易くはいれるやうな家であつた。

「鑛山の會社ぢや、時局柄仕事はいそがしいだらうね？」

頼んだ冷たいものを呑みながら、志氣太は心の中に漂つてゐる情緒とはおよそかけ離れた話題をとりあげた。

「ええ。とても」

忙がしくて困るといふよりも忙しいことに喜びを抱いてゐるやうな答へ方であつた。

「結構だね。ぢやアお給金もふんだんに貰へるね」

「まア冗談を。そんな會社ではございませぬわ」

「ほう。重役さんがケチなのかね？」

「いゝえ。さういふ意味ではござりませぬの」

三保はかたく首をふりながらやゝ熱ばんだ調子で言つた。

「それと反對ですの。あたし共の重役さん方は、それはもうほんたうに感心な方

ばかりですわ」

四

三保は、自分の勤めてゐる鑛山會社の全重役が、配當を辭退して、新らしい事業經營の典型をつくり、國家が必要とする生産力の擴充に一路邁進してゐるといふりつばな話を、めんめんとして説明しはじめた。

志氣太は、さういふ話をはじめて耳にした。で、彼女の説明を聴きながら、その津俱銀山株式會社といふ會社に對する認識をあらたにした。

三保はなほも語りつゞけた。その語調はもとより女らしいものではあつたけれども、なにかひたむきな、何もかも仕事の中にうちこんでゐるといつたやうな妙に熱っぽい話しぶりであつた。

志氣太はもう一度、彼女がかつて結婚に失敗したことがあるといふ、松太郎の

女房のはなしを思ひ出した。そして、子供の頃の、あの桑畑の中での思ひ出から湧きあがつて来るふしぎな情緒を呑み込みながら、「フーン」とか「ほう」とか短い感歎詞を洩らしては、彼女の話に相槌をうつてゐた。

むろん彼女のはうでも、子供の頃のことを忘れてゐる筈はない。いやそれどころか時どきカチリと見交はす眼の中には、明らかに彼女もそのことを思ひ出してゐるに違ひない光りがあつた。全く、二人とも、子供の頃には大の仲好しであつたのだ。そして二人ともすつかり大きくなつてから、いま、久し振りにひよつこり出會つたのである。であるから、もう少し、いや、せめてひとくちでも、昔のゆたかな思ひ出ばなしを交してもよきそうなものである。にもかゝはらず、二人はぜんぜんそれにはふれようとしない。いつしようにけんめいに、津俱銀山株式會社のはなしばかりを、しつづけるのであつた。

「おやおや。志氣太さんではござるませんか」

とつぜん、やはらかな老婦人の聲が、耳元でおこつた。

志氣太はおどろいて、三保から向きなほつた。

と、たつたいま、この古梅園へはいつて來たばかりらしい、若い娘を連れた品のいゝ老婦人が傍に立つてゐた。千尋の母のくすゑと、その姉娘の萬壽子であつた。

「やあ。これは、石渡の小母さんでしたか。おや萬壽子さんも。ま、どうぞ、まアお掛けになつて下さい」

「やつぱり志氣太さんでしたねえ……まアまアなにからご挨拶申あげていゝやら過日は、信吉が生まれて。またその節は千尋を……」

「いやいや。私のはうこそ、却つてどうぞ。お掛けになつて下さい」
くすゑは、チラと三保のはうを見てから、

「ありがたうござるます。でも、お連れさんがおありのやうですから」

「いやアこちらは私の子供の頃の友達ですよ」

ほんたうのことをいつたのであるけれど、なんといふことなしに志氣太は頭をかいた。

三保が、氣をきかして立ちあがつた。

『あの、あたし、ちよつと寄るところがござりますから、これで失禮いたします。いづれまた……』

三保は、くすゑと萬壽子に丁寧會釋して、席を外した。

「わたしは、かういふお店にはサツパリ縁がないのですけど、今日はお使ひに出ました序に、萬壽がやかましいものですからね」

くすゑは、なにか辯解するやうにさういつて、席につくと、いかにも月屋の女主人らしい律義さで、改めて志氣太へ、ていねいな挨拶をしはじた。

萬壽子は、店を出て行く三保の後姿へ、ちよつとのあひだ、かなり峻しい視線

を送つてゐたが、老婦人の挨拶の相手にさせられてゐた志氣太には、まるで氣がつかなかつた。

五

「けふは、こちらへお買物でござりますか？」

志氣太が頼んだ冷たいものを口にしながら、くすゑがいつた。

「ええ。ちよつと本屋まで」

「さうでござりますか。それはまアいゝところでお眼にかゝれましたですね。では、お歸りに是非ともおよりになつて」

「ええ。寄らしていたゞけるといゝんですが、けふはもうだいぶおそくなりまして、家のはうにも、まだ用事がありますから」

「まア、そんな水息いことをおつしやらずに、およりになつて下さいまし。お構

ひは出来ませんですけど」

「ええ。ま、この次、是非とも寄らせていただきます」

「さうでござるますか。それはまア残念ですわねえ」

くすえは萬壽子と顔を見合せながら、ほんたうに残念さうに肩を落した。

志氣太は、さつきから、なぜともなく氣持が散漫になつて、話す言葉にも實がはいらなかつた。たぶん、さつきはからずも出會つた幼馴染との奇遇から、志氣太が勝手にデッチあげてやゝいい氣持でひたつてゐたふしぎな雰圍氣といふものが、このをばさんがたの出現によつて案外あつけなく消え去つたことから生じる、一種の軽い放心であつたかも知れない。

けれども、やがて志氣太は、自分の氣待をふるひ起すやうにして、一つの話題をとりあげた。

「あゝ、信吉さんは、いかがですか？」

すると、くすえの顔が妙に堅くなつた。

「ええ。ありがたうござるます。ですけど……實はねえ、志氣太さん、いちどあなたにも、お聴き願ひたいと思つてゐたのでござるますけどね。あの子にも、ちよつと困りましたのですよ」

「ほう。それはまた、いつたい、どういふことですか？」

志氣太は、くすえの顔にチラリと浮んだ、信吉の母親らしい、いや、いかにも老舗の女主人らしい、或る種の威嚴をふと覺えながらも思はずかう訊ねた。くすえは、ひとけのすくない店の中をそれとなく見廻してから、聲をおとして靜かにいつた。

「——信吉も、戦争へ行つて參りましてから、すっかり變つてしまひましたですよ。ええ、それはもう、あなたもご存じのやうに、もともとあの子は、氣性のはげしい子でござりましたけれどね。それがまア、この頃ではいつそうきつくなつ

て参りましたね。それでいま、わたしたちも、ほとんど困らされてゐるのでござ
りますよ」

「ははあ、どんなことでお困りなんですか？」

「まアそれが、こんなところで申上げるのもなんですけど、あの子は、もう、商
賣をやめると申してゐるのでござりますよ」

「商賣をやめる？」

「ええ。つまり、轉業をしたいといふのでござりますがね」

「ははあ——」

(それは結構ぢやアないですか)となにげなくいひかけるところで、あやふく志
氣太は口をつぐんだ。うかつに返事の出来ない妙な自分の立場に、流石の志氣太
も氣づいたからだ。

——なにしろ相手は、月屋の未亡人である。老いたりといへども、これまで女

手一人で老舗の商賣を立派に切りまわして来た女丈夫である。しかもそのひとが
どうやら話の前後の模様では、自分の件よりも、青柳村の若先生を信頼しての打
ち明けばなしらしい話しぶりなのである。

志氣太は口をへの字に曲げて腕組みしながら、いつぞや富川町の射的屋の前
で、鐵砲を打たずに引返して来た勇敢なる歸還軍曹石渡信吉の、あのクソ面眞目
な顔を思ひ浮べるのだつた。

六

「それはもう、この際轉業といふことは、お國のためでござりますから、信吉の
申しますことを間違つてゐるといふのではござりませんですけどね」

と果してくするは、あたりにひとけのないのを幸ひ、やゝ氣むづかしげな口調
で、靜かに切り出した。

「あなたもご存じのやうに、わたしどもは、店は小さうござりますけど、のれんの古いことでは、さう申してはなんですけど、これでも指折りのほうでござりますからね。まア、月屋は先祖代々、呉服太物のあきなひで、過ぎさしていただいで来たのでござりますから、その商賣をさうやすやすと投げ出したりしましたのでは、第一ご先祖さまにも申譯けがござりませんですし、それに、なくなりました主人も、ご存じのやうに、あの通り商賣熱心なひとでして、町内の發展會長も勤めてをりましたり、まア、町といつしよに家業の繁昌いたしますことが、ただひとつの念願だったのでござりますからね。——でもまア、それもこれも、お國のためでござりますから、いづれなんとか勘考さしていただかねばなるまいとは存じてゐるのでござりますけど、でも、ものには順序といふこともござりますし、大部分の同業のお方も、いろいろ考へてゐられることとござりますからね。それをまア。信吉と來ましたら、いますぐにもやめてしまふやうに申してゐるの

でござりますから、ほんとに困つてしまふのでござりますよ」

志氣太は、腕組みしたまゝ、熱心にくすゑの話を書いてゐたけれど、その顔には、いつのまにか、例の、敵とも味方ともわからぬやうな茫漠たる表情が漂ひはじめてゐた。

すると、やつとくすゑも、見やうによつてはひどく頼りないその志氣太の表情に氣づいてか、やゝあせり氣味の調子になつて、よしんば一步譲つて信吉のいふ通りにするにしても、せめて萬壽子と千尋の二人の娘を縁づけてからの轉業にしたい、この二人の娘だけは、なんとしても代々つづいた月屋ののれんをくゞらして嫁にやらねばさだめし娘たちの肩身がせまからうといふやうなことを、それとなくほのめかすやうに訴へ、それから、いづれ場合によつては、親戚の方々にも御相談願はねばならないやうなことになるかも知れないけれど、まづとりあへずその前に、勝手なお願ひで恐縮であるが、またお暇なときにでもひと晩千尋をお

貸願ひたい、あの娘なれば信吉を説きふせることが出来るかも知れないから、といふやうなことを諄々と訴へた。

「やアそんなことはおやすい御用です。承知しました。ひと晩でもふた晩でも、早速ちいさんをお寄こしいたしませう」

志氣太はさういつて気軽に引受けると、ちやうどその時、ドヤドヤと四五人の國民服を着た客たちがはいて來たのをしほにして、三人はやつとみこしをあげた。

古梅園の前で石渡母娘に別れると、志氣太は、自轉車にのつて、もうすつかり傾いた陽射しに追はれるやうにしながら、急ぎ青柳村へ歸つて行つた。

家に戻ると、早速志氣太は、千尋へ今日の模様を手短かにはなし、いつでもいゝから一度家へ行つてあげるやうに、ことづけをつたへた。そしてそのあとへつけ加へていつた。

「むろんちいさんはそんなことはないだらうけど、月屋ののれんを背負つて行か

なくちや、お嫁に行けないやうでは、幸福な結婚は出来ないよ。まアひとつ、しつかり兄さんの味方になつてあげなさい」

と、俄然志氣太は、石渡未亡人が聴いたなら、眼をまわすやうな敵性を發揮した。

「悦。悦。まだ夕刊は来ないかな？」

居間の籐椅子に横になつたまゝ、龍樹先生が、しきりに臺所のはうへ聲をかける。

「はいはい。お呼びでござりますか？」

悦が、手を拭きながら顔を出した。

「夕刊はまだ来ないかと、訊いとるのぢや」

「はい。まだ参りませんけどね」

「困るぢやないか。さう毎日毎日おそくなつちや。いくら日が長いといつても、

この頃はいつも八時過ぎぢやないか」

龍樹先生は、ガラス戸の向ふの、暮れかゝつた夕空を眺めながら、いかにも御機嫌が悪い。明けても暮れても、新聞とラヂオだけが日課である先生にとつては、新聞のおそいことはどうにも我慢がならないらしい。

「あなた。さうおつしやつても仕方がないではございませんか。配達の子供が工合が悪くて休んでゐるのですからね」

「例の、志氣太のはなした子供か？」

「はい、さようでござりますよ。現にいまも、志氣太はその子供のところへ行つてゐるのですからね」

「あゝ、志氣太は家にゐないのかな」

「ええ。夕方から出掛けましたですよ。お風呂へはいる前にすまして來るとか申

しましてね。

それで、龍樹先生は、だまつてしまった。

その工合の悪い子供といふのは、富橋に近い、村はづれの農家の子供であつたが、志氣太がはじめた早期診断の結果、軽症ではあつたけれど療養を要する兒童といふので、もうすつと前から志氣太はその子供のところへ時どき通つてゐるのであつた。

龍樹先生は、窓の外の夕空を眺めながら、髭をなせはじめた。

——どうやら、御機嫌がなほりはじめたらしい。

新聞がおそくなることは先生にとつては面白くないことであつたけれど、志氣太がそのことに關係してゐることを考へれば、もうケロリと不満を忘れることの出来る先生であつた。

龍樹先生は、時どき自分の若い倅とのあひだに意見の喰ひ違ひを生じて、穩か

な議論をたたかはずことがあつた。そしてそんな時にはきまつて先生は、志氣太の突進主義に對して、内心すくなからぬ不満とあぶな氣とを覺え「あれはまだ若い」とか「志氣太の行き過ぎにも困つたものだ」などと、やゝ威嚴をこめた口調で、ひそかに悦に洩らしたりするのであつた。けれども、それでゐてこの老いたる先生は、(これは誰にも洩らさなかつたけれど)心のなかの一隅では、ひそかに志氣太の考へてゐることに満腔の共感を覺え、人知れず倅の志行に對して熱烈な支持を抱いてゐるのであつた。もう少し立ちいつて付度することを許して貰ふならば、恐らく先生は、志氣太の言動によつて必要に迫られるどうにもならない自分への辯護を、志氣太の若さに對する不満として適當に現はしてをくと同時に、いちめん、自分の過ぎ去つた生涯に於てなし得なかつたところの夢が、たつた一人の力とたのむ倅によつて、少しづつでも實現されようとしてゐることに、云ひしれぬはげしい期待とよろこびを覺えてゐるのであるらしかつた。

ともあれ龍樹先生は、もうさつきの不機嫌はケロリと忘れて、ガラス戸の外の夕空を眺めながら、その空の下で一人の少年の保護をしてゐるであらう志氣太の上を、明るい満足の微笑と共に思ひやるのであつた。

二

貧しい農家であつた。

少年の名前は乙部春一といつた。弟と妹があつたけれど両親は死亡して、お百姓の爺さんと婆さんの手によつて面倒を見て貰つてゐた。

來年の春、青柳の國民學校を卒業したら、富川の工場へはいつて産業戰士になるのだといふ元氣な少年で、體格も悪いほうではなかつたけれど、働き手の両親を失つたために貧しい家計を助けようと、大事な發育期にかなりの無理をしてゐた。

村内の新聞配達を手傳つてゐたのはごく最近のこと、この二月までは、ずるぶん永い間、毎日缺かさず、再生絹糸の内職をしつづけてゐたのであつた。

本場のお膝元である富橋の近くに育つただけに、志氣太もその内職のなんたるかくらゐるは心得てゐたのであるけれど、爺さん婆さんから、春一少年が通學の傍らその仕事に大人も及ばぬ程の根をつめて従つてゐたと聞かされた時には、思はず腕を組んでウーンとばかり唸つてしまつた。

讀者も既にご存じの通り、この再生絹糸といふのは、戦前、志氣太の郷土などで造られた日本の生糸が、はるばる海を渡つて紐育の生糸商の手に移り、例のベラ棒に長い女の絹靴下となつて百貨店からヤンキー娘の手に渡るのであるが、なにしろ質素儉約を人生最大の悪徳と心得てゐる彼女らのことであるから、ちよつと爪先や踵に穴でもあくときすぐボンボンと氣前よく穿き捨てられてしまふ。するとたちまち廢物となつてこんどは前のコースを逆に西へ西へと流れてロサンゼ

スやシャツルあたりのボロ問屋の手に集められ、こゝで他の綿製廢品や毛糸屑や時には妙な下着までも紛れ込んだ一緒くたの千封度一梱といふ大きな貨物に造られて、二東三文の捨値で神戸や横濱の俗にメリケン屋とやら呼ばれた拔目のない輸入商の手に逆輸入され、再び懐しのふるさとである富橋や福井や八王子あたりの再生業者の手許へ戻つて來ると、素朴な生れ故郷の人びとの手によつて解きほぐされてもう一度立派な一等絹糸となり、縮緬、壁織、お召、紬なぞの高級絹織物から、帶地、袴地、モウル類、さては絹洋服地から半襟地にいたる分野に再生されてゐたのであつて、さういふ、いはばアメリカのお轉婆娘たちがさんざん股の下に穿きまわつたシロモノを、世の善良なる澁好みの旦那方や奥様方が、ひどく尤もさうな顔をして身にまとつてゐたり、或は、さういふ半襟をそのへんの粹な姐さんがたやお嬢様がたが、とり澄ました顔をして白い襟足にからましてゐたり、或はまた、そのやうな來歴の洋服に得々として身をつつみ、コツテリとボマ

ドをつけた頭の髪の毛をなんとかやらいふハリウッドの役者の髪型にときつけて、銀座あたりをテケレ〜とあるいてゐた變テコな青年たちが（尤もこのやうな手合ひはいまでは銀座などには殆ど姿を消してしまひ、代りにこの地方、この富橋地方の私鐵の停車場などで、どうかするとそのもう一段低いのをチョイ〜見掛けるのであるから、生糸といへどもよく〜故郷が戀しいのか因縁のおそろしきをつくづく感じる次第であるが）兎に角、そのやうにして、皆んなしてけだもの臭いアメリカ女の裾埃りを拜してゐたのであるから、いまから考へてみるとなんとバカバカしいはなしであつた。

で、そのやうな経路をたどつて行はれる再生絹糸の靴下ほぐしの内職を、青柳村の乙部春一少年が、在庫品のあつたこの二月まで、少しでも家計を助けようといつしやうけんめいに働きつゞけ、つい、いつのまにか健康を害してゐたといふのであるから、むろん通學に支障ない程度の輕症ではあつたけれど、志氣太はそ

の少年の病氣に對してたゞならぬ敵愾心をいだいたのであつた。

三

早期診断によつて志氣太が発見した乙部春一少年の症状はまったく軽度のもので、レントゲン線による病竈も殆ど指摘に困難を感じるほどの小さなものであり、わづかに、時折寝汗をかいたり咳や痰が出たりする以外には、本人にもまるで自覚症状はなく、殆ど平常と變らぬ元氣さで跳ねまわつてゐたほどであつたけれど、志氣太は直ちに學校の先生から家庭の事情を聞きとると、管區の方面委員に協力して貰つて早速適當の處置をとり、療養の模範的な指導に乗出したのであつた。

新聞を配達する仕事はやめさして、それによつて生ずる家計の困難は、方面委員に頼んで各種の救護法規を活用し、春一少年が來年學校を卒業して一人前になるまで保護して貰ふことにして、療養に要するわづかの經費は自分が負擔することにした。

とにした。

學校のはうは休ませる程でもなかつたので、受持の訓導にも協力して貰ひ、當分運動や勤勞は避けることにし、その他一二の注意を與へて普通に通學させることにした。

「はア先生様。こんな元氣でをつて、うちの春一は、病氣でござんすかのんし」と春一少年は志氣太から自分の體のことをきかされても、相變らず明朗で、元氣で、少しも早く病氣をなほして立派な産業戰士にならうといふ、幼いながらも健氣な闘病の意志を持つてゐたけれど、爺さん婆さんは流石にいさゝかおどろいて、孫の病氣をいぶかるやうにかう訊ねたものであつた。

「さうです。病氣です。けれども、確實になほる病氣です。まア、例へば、落ちて來たばかりの焼夷弾みたいなもので、いまのうちに處理さへすればなんでもなく片附くものなんです。これを放つて置いて、發火してからだと、一寸面倒なも

のになりますかね」

「はア、そんなもんでござんすかのんし わしどもア昔から、さういふ、結核ちゆう病氣アなほらんもんだと、耳にたこが出来るほど聞かされとりましたが、はアそんなもんですかのんし」

「いやそれは、いままで皆さんが結核だといつてゐたのは、いまの焼夷弾の話で行くと、燃上つてしまつてからの、つまり手遅れになつてしまつてからやつと氣がついて、騒ぎ出した場合の奴でして、春一さんの場合などは、まださうならなはずつと先に、こちらから體の中の病氣を訪ねて行つてやつつけるのですから、これはもう確實に早くなほつてしまひます。——それに大體、どんな病氣でもさうですけど、特に肺結核などといふ病氣はひとりでもよくなほる病氣でしてね。大都會に住んでる大人の人などは、九割以上が結核に感染してゐて、そのうちの半數くらゐは、調べてみると、なんともう、固まつた病氣の痕が肺の中に

みつかるんです。で、しかも面白いことには、それらの人たちは、いままでに結核にかゝつた覺えは全然ないのです。覺えがないくらゐですから養生などはさらにした覺えがない。にもかゝはらず、病氣はもう固まつてなほつてしまつてゐるといふんですから、考へてみればこれくらゐなほりやすい病氣はないと云へますね。ま、委せて下さい。學校を卒業したら立派な産業戰士になれるやう、してみますから」

爺さん婆さんは、まるで神様みたいに頭から志氣太を信頼し、

「はア、なにぶんよろしく願ひ申します。役場のお助けまでお話下されて、こんなにまでして頂いたら、はア罰があたりますだ」

と、涙をさへ浮べながら、絶對的に志氣太の指導に服しはじめた。

志氣太は、東京の病院で扱つて來た一部の患者たちのことを思ひながら、ひとつの確信を掴んだ。

いつたい、都會の患者、特にインテリの患者などで、なまかぢりの醫學らしきものを心得てゐるやうな男だとか、せいぜい婦人雜誌の附録程度の知識でもつていつぱし醫療の道に通じてゐるかの如く考へてゐるやうな一部の良妻賢母だとかいふものくらゐ、厄介な患者はないと常々志氣太は考へてゐた。

さういふ患者に限つて、人間の體にそなはつてゐる尊い自然の力を無視してゐたり、徒らに醫師の指導を疑つたり、勝手な批判を加へたり、修正？ したり、眞に醫師の價値が判りもしないでゐて醫師に對する評價をさへしたりして、むろん醫師の中にも正しくない者が往々ありはするけれど、さういふ素人知識から來る妙な自惚れのために、どれだけ今まで適正な醫療の處置が支障を來たされて來たかも知れないのであつた。

それが、この乙部春一少年のところ、患者自身はいふまでもなく、家族の爺さん婆さんまで、絶對的に志氣太の指導に服してゐる素直な態度に接して、貧しい無智な一介のお百姓ではあつたけれど、志氣太はその人たちの中に最も立派な患者の態度を見、醫師と患者との理想的な關係は、いゝ醫師の指導のもとになんもかも委せた患者が素直に従ふことである、といふ平素の考へを一層強め、よしこれなればこの春一少年は意外に上成績を以つて治してみせるぞといふ、明るい確信をつかむことが出來たのであつた。

そこで志氣太は、ほかからみるとをかしいくらゐの熱意を以つてこの少年の療養指導に乗り出し、時どき暇を見ては、熱心に乙部の家へ通つてゐたのだつた。で、けふも、夕食をすましてからひと疾りかけつけて來ると、けふはこの前ツペルクリンの注射をしてをいた春一少年の弟や妹の、反應の檢診を兼ねて來たのであるが、元氣な子供たちがどこかへ遊びに行つてゐてなかなか歸つて來ないの

で、つい爺さん婆さんなどの世間ばなしに、時間を過しておそくなつてしまつた。

あたりがもうすつかり暗くなつてしまつてから、腕白さうな弟と妹は、藁草履のすそをベタベタ鳴らして戻つて來た。

「お前ら、先生様を待たして暗くなるまでどこをうろついとつたぢや」

爺さんに叱られて小さな弟と妹は、土間に立つたまゝはなをすゝりあげた。

志氣太は靴をはきながら、女の子の腕をとりあげて、たつた一つしかついてゐない暗い電燈の光りにかざして見た。陰性であつた。

こんどは男の子の、泥だらけの腕をとりあげて、まくつてみた。これも、陰性であつた。

志氣太はほつとして、いま研究所へ交渉してゐるB・C・G免疫注射のワクチンを、もしもうまく手に入れることが出來たなら、この子供たちにも恵み與へて

やらうなどと考へながら、子供の腕をはなして立ちあがらうとした。が、ふと、さつきからその男の子が、右手のこぶしをしっかりと握りしめてゐるのに氣づいてわらひながら、

「坊は、なにを掴んでゐるんだい？ 大事なものかい？」

すると子供は、黙つたまゝニヤ／＼わらひ出した。

「をぢさんにも見せておくれ……どれどれ」

きたないこぶしを自分の手の上にのせて、ひろげてみようとした。

と、ひらきかゝつた子供の手の中から、小さな青い光りがスーッと舞ひあがつた。螢だつた。志氣太は口をあげたまま顔をふりあげたが、もうその時には光りは見えなかつた。いつたん舞上つた螢はすぐに力なげに志氣太の頭髪の中へころげ落ちると、そこで微かに光りはじめてゐたからだ。

志氣太はなにも知らずに、上機嫌で乙部の家を出た。

「あの、青年のかたが、お二人お待ちですけれど」

志氣太が春一少年の家から戻つて來ると、玄關へ迎へ出た千尋が鞆を受けとりながらいつた。

「青年？ 患者かね？」

「いゝえ。あの離れのはうの……」

「ああ」

と、志氣太は氣がついた。

今夜、志氣太の家で、いつか志氣太が喜惣に持ちかけたことのある、青柳村文化部の、例の研究會を開く豫定になつてゐたのだ。これでもう、二度目の會合であつた。

「定森君は？」

「いゝえ、あの方はまだいらつしやいません」

「さう。ちやア僕は、風呂はあとにするからね、みんな先にすませてくれ給へ」

志氣太はそのまゝ、母屋の廊下をぬけて、離れの自室へやつて來た。

二人の青年は、あけ放した部屋の中で雑誌などをバラ／＼讀んでゐたが、志氣太がはいつて行くと、やゝ堅くなつて挨拶した。二人とも家業は百姓で、志氣太よりも三つ四つ年下であつたが、そのうちの一人は細君も子供もあつた。

「あの、こないだお借りした農士道の本、たいへん得るところがありました。さつきお返ししておきましたが」

細君のあるはうの青年がいつた。志氣太は大きな顔をして、

「さうかね。それはよかつたね。まアどの本に限らず、貸出しは無期限なのだから、もつとほかの忙しい人達にも、遠慮なく利用するやうに進めてくれたまへよ」

「はア。これで、なかなかやつとるですよ」

青年はさういつてわらつてから、

「——これは、私の勝手な意見ですが、もう少し、女たちに向くやうな本も、ふやして頂けたらと思ふですが」

「といふと？」

「はア、むろんさういふものが、ないといふわけではないですが、どうも少し、全體に堅いやうに思ふですがね。それはもう、指導的な図書館ですから、讀者に媚びる必要はないでせうが、實際問題として、まア私んとこの女房なんか、適當と思はれるやうなものをあてがつてやつても、二頁も讀むと、もう晝間の疲れで高野ですからねえ、そのくせ婦人雑誌などは割に讀むですから」

「婦人雑誌をとつてるの？」

「いえ。さういふわけでもないですが、時どき頼まれて、古いのを買つてやりま

すから」

「婦人雑誌といへば」

と、細君のなはいはうの青年が口を入れた。

「私こないだ、山の親類の娘に、むろん百姓ですが、なんでもいゝから婦人雑誌を一冊買つて送つてくれと頼まれて、富橋へ出た序に本屋へ寄つてみたですが、一寸困りましたよ」

「どうして？」

「つまり、どの雑誌も非常に立派に出来てゐると思つたのですが、どうも、山の親類の百姓娘が、讀んでしまつてから自分の生活をみじめに感じないやうな本を、と思つたらちよつと選擇に困つてしまつたんです」

「ウーン、なるほど。——どうもそいつは、むつかしい問題だな……で、結局、それでどうしたの？」

「結局、あまり考へ過ぎたら買へなくなつてしまつて、家へ歸つてから、組合の（郷の光）を送つとききました」

それで、志氣太も、細君のある青年も、思はずわらつてしまつた。そこへ、千尋に案内されながら、定森喜惣がやつて來た。

「いままで役場ををつたもんですから、ついおそくなつちまつて」

さういつて、額の汗を拭きながら腰を下ろすと、いきなり真面目な顔で志氣太へいつた。

「倉松さん。どうも困つたことが起きあがりましたよ」

六

「ほう。どんなことが起きたんだね？」

志氣太の眼が、やゝ精彩を帯びて喜惣を見た。

「まア研究会などはあとまわしにして、ひとつ、早速ご相談願ひたいですがね。尤も、これだつて大事な研究問題ですが」

喜惣は、息を弾ませながら切り出した。

「實は、例の早期診断の、レントゲン検査に要する實費のことについてなんです。こないだもちよつと御報告して置きましたやうに、村長も助役も、倉松さんの御好意にすつかり感激しちまひまして、早速、どうも最初のお約束より少なくて残念ですが、それでもとりあへず、まづ第一期として六百圓、なんとか捻出しまして、増産施設費の追加豫算へ附帶さして、來月早々にでも村會へかける準備を進めてゐたわけなんです。そいつが實は、いまになつて、とつぜん暗礁へ乗りあげちまつたんです」

「なに暗礁へ乗りあげた？ ウーン。そりやまたいつたい、どういふことだね？」
志氣太は急に大きな顔になつて、思はず身を乗り出した。

「金でも出来なくなつたのかね？」

「いえ。さうぢやアないんですが。——實は、最近になつて、緊急を要する費目が出来たといふので、村長の腹がぐらつき出したのです」

「ウーン。いつたい、どんな緊急費目なんだね？」

「それなんですがね、問題は——」と喜惣は、言葉をかみしめるやうにしながら「實は、倉松さんは、未だご存じないかも知れませんが、この青柳の村會議員や村の首脳部の間には、もう暫く前から、近隣の市町村の情勢に刺戟されて、村を發展させるために何か工場でも引つばつて來よう、といふやうなもくろみがあつたんですがね。で、ご存じと思ひますが村會議員の洲崎落太郎氏。あの人なんか、まア中心的な主唱者になつて、熱心に村内の輿論を煽つてゐたわけなんです、それがこの村會の選舉などで暫く立消えになつた形でしたが、こんどまた非常に熱心にぶり返されて來たんです」

「うム。それで」

「それで、つまりまア、その大目的を實現させるためには、まづ先進町村を廣く視察して、早速にも活潑な運動にとりかゝらねばならないといふ機運に、どうやら村長が動かされまして——」

「わかつた」と志氣太がうなづいた。「それでつまり、その六百圓の支出を、そのはうへ使はうと考へだしたんだね」

「まア手つとりばやくいへばさうなんです。衛生費から先進町村視察費のはうへ乗りかへようといふわけです」

「うム。しかし、それにしては、少し金額が多すぎりやしないかな」

「それはまア發展計畫委員會とでもいふようなものをつくつて、廣く視察團を派遣する以外にも、いろいろと運動にたづさはつて買ふ、委員の費用辯償なども、ふくまれて來るだらうと思ひますがね」

「ふーん、どうも驚いた話だね。これは……」

志氣太は、あきれた顔をして腕を組んだ。

二人の青年は、だまつたまゝ喜惣と志氣太のはなしを訊いてゐたが、そのうちの一人は、さつきからひそかにいぶかるやうな視線を、志氣太の頭の髪の毛のはうへチラ／＼とそそいでゐた。廊下にあし音がして千尋がお茶をはこんで来た。

七

「洲崎氏といふのはなかなかの愛郷家なんだね」

千尋がお茶を置いて出て行くと、志氣太は、うつそりと切り出した。

「はは……まアね」

志氣太の語調の中に、皮肉のやうなものを感じて、喜惣はわらひながら答へた。
志氣太はつづけた。

「しかしどうも、なんだね。よくまア村の首脳者たちが、あゝいふ先生の説などに今更そんなに熱心に動かされたものだね」

「そこなんですよ。問題は」

と喜惣は眼をかがやかせて、乗出した。

「——むろんもう、あの洲崎個人の人物などは、この場合問題でないんです。誰れだつて、心あるものはみな、腹の中で顔をしかめてゐるんですから。けれどもこの、村の發展——といふやうなことになる、これはもう、誰れが唱へよう問題はずいぶん別な魅力を以つて、みな頭へ迫つて来るのです。そしてこれは恐らく村の當局者ばかりではなく、洲崎氏以外の村會議員にしても、さういふ問題になつて来ると、やはりどうも、動かされるんぢやないかと、思はれるんです。實際この、村人たちの持つてゐる、なんといいみますか、村の發展とか、郷土の利害得失とかいふやうな問題に就いての關心といふものは、ちよつとやそつとのこ

とでは決して覆へさないやうな根強いものですからね」

「うん、それはいゝんだ。さういふ根強さはいゝんだよ。郷黨が郷土を忘れることは、百姓が土を忘れると同じやうに危険なことだからね。けれどもそれが、ケチ臭い意識にとらはれてゐたり、古臭い狭苦しい觀念に覆はれてゐたりして、ただの盲目的な熱心であつたりすると、昔の代議士みたいなものに乗ぜられたり、またこんどのやうな妙な話が出て來たりするからね」

「さうです。まつたくです。——それです。ま、そんなわけでこれは放つては置けないと思ひましたので、早速私は、村長に會つたり、助役に會つたり、助役のはうはやゝ話もわかりますから、兎に角いろいろとぶつかつてみて、村長のしつかりした腹を打診する傍ら、問題の性質が違ひますから、その視察費のはうは第二次の追加豫算にでも廻して貰へるやう頑張つて見たんですが、するところ、でもう一つ、問題が出來たんです」

「うーん。よく問題が出て來るんだね」

志氣太が、顔をしかめた。

「いや私も、村長や助役に當つてゐるうちに、はじめてわかつたわけなんです。實は、今までその、村の發展、工場誘致問題の主唱者は、洲崎落太郎が中心になつてゐるものとはかり思つてゐたんですが、ところがなんと、その洲崎落太郎の背後に、もつと大きな、有力な黒幕がついてゐたんですよ。そしてしかも、その黒幕の人物といふのが、實はいまの村長が就任の時に、暗黙の支持を村長に與へてゐたといふ、微妙な關係があるんです。つまり村長はその黒幕の人物に對して頭があらがないのです。——問題の中心はこゝにあるんです。おわかりになりますね」

「うム、よくわかる。で、誰れだね？ その、黒幕といふのは？」

志氣太が、ポヤツとした顔つきで訊ねた。

「お向ひですよ」

「お向ひ？」

「稻垣兵衛さんです」

八

「ま、さういふわけでして」

とやがて、お茶を呑みながら喜惣はつゞけた。

「つまり村長は、あなたの好意ある申出には非常に感激してゐるのですから、この仕事への協力を裏切れることは、私達部下の手前も大へん心苦しいですがさつき申あした、例の、村の發展——といふことの持つてゐる妙な魅力と、自分の椅子を暗黙に支持してゐてくれる稻垣兵衛氏への顧慮とにひかされて、最初の考へがグラ、と崩れかゝつた、といふわけなんです。なにしろ、稻垣さんとい

へば、このへん切つての大地主ですし、氣性もあの通り太ッ腹の人で、村一番の大人物といった格ですからね。洲崎落太郎などは、單なる傀儡で、お先棒をかついでゐるに過ぎないですよ。尤も、洲崎自身としても、村の金で方々の變つた土地を遊び半分に視察して廻るなどといふことは、昔から好きでしたからねえ。それに、あの先生は、ほかの議員はそんなことはないですが、あの男は、私や、こゝにゐる連中を、蛇蝎の如く嫌つてゐますからね。それやこれやの意味で、このお先棒は相當熱を入れてかついでゐると思ひますよ」

「うん、さういへばあの男、こないだ僕のところへも、一度怒鳴り込んで來たぜ」

「な、なにをいつて來たんです？」

「いや、それはもう、直接君たちに關したことぢやアないから、僕だけで處理して行かうと思つてゐるがね」

志氣太が口をつぐんでしまふと、喜惣は急に改まつた語調で、やゝいらいらし

たやうに切り出した。

「——で、まア、困つた話といふのは、いま申上げたやうなことなんですが、いつたいこれはどうしたもんでせうかねえ」

「どうした、といふと？」

「いや、私としても、このまゝひつこめませんし、あなたに對しても……」

すると、志氣太は、氣輕に答へた。

「あゝ、そのことかね。そりやアやるさ」

「やるさ——と仰有ると？」

「やるんだよ」

「やる？」

「さうさ。わかつてゐるぢやないかね。豫定通り仕事をやる」

「え。そ、それはわかりますが、でも豫算の方がそんなことになりかけまし、た

し、さうさうあなたにばかり御負擔かけてもいけませんから……」

すると志氣太は、大きな體を戦車のやうに、グラリと喜惣の方へゆり出しながらいった。

「君。僕は何も、その金を自分で出すとはいはないよ。なアにここで五百や六百の金など、相手は天下の結核だ。どうせ出しついでに必要とあれば惜みはしないがね。しかしそれは、僕が満足出来るやうな事情のもとに於てであつて、いま聞かして貰つたやうな低調な事情のために、最初の計畫を曲げて金を出すなどといふことは、將來のしめしのためにも出来ないよ。まア、この問題は、一つ僕にまかせてくれ給へ。なんとか切り拓いてみよう。とにかく僕はね、一たんかうときめてかゝつた仕事は、なにがなんでも斷じてやめないから」

志氣太はさういつて、言葉を結ぶと、泰然自若として煙草を吸ひはじめた。

すると、ちやうどその時、志氣太のモヤモヤとした頭の髪の毛の中から、小さ

な青い光がふはりと舞ひ上つた。螢だつた。線香の煙のやうに二尺ばかりまつすぐに上ると、それから光つたり消えたりしながら静かに横に流れて、明放した廊下から庭のはうへ舞ひ出て行つた。どうやら、春一少年の家から、ついて來た螢らしい。

さつきから時折チラチラと志氣太の頭のはうへ視線を送つてゐた青年が、まづニコリと遠慮深くわらつた。それから、他の青年と喜惣とが、氣づいて微笑した。志氣太だけが、なにも知らずに悠悠と煙草を吹かしてゐる。

金魚にも心あれど

—

石渡未亡人は、はなはだ心外であつた。

お湯をすましてサツパリした浴衣に着かへると、いつものやうに中の間の佛壇の前へ坐つてお燈明をあげ、線香をともし合掌したまゝ、亡夫の位牌をいっになく長いあひだ、ヂツと仰ぎつづけてゐた。

もう五十を幾つも越した年配ではあつたけれど、永いあひだ心を張りつめて働いて來た人だけあつて、湯あがりの皮膚なぞ歳よりはすつと若々しい艶をたたへて燈明の光りに美しくさへ輝いてゐた。

けふの午後、ひと晩泊りの豫定で、青柳村から千尋が歸つて來たのである。

——こないだ、街で偶然出會つた志氣太へのことづてが、聞きとどけられたのだ。

家族のうちでも、いちばん信吉と氣心のあつてゐる千尋を味方につけて、それで信吉を説いたなら、頑固な息子のはやり勝ちな氣持を、いくらかでも押へることが出来るかと考へてゐた未亡人は、早速千尋へ、轉業のことについての同業者のあひだでの微妙な事情や、自分の氣持などをひと通り話したうへで、

「いちどお前からも、それとなく話して、兄さんの氣持を少しでも引きとめて貰ひたいと思つてね」

早速、持ちかけたのだつた。ところが、なんぞはからん、その千尋が一向に活潑な共鳴を見せず、計畫はすつかり齟齬を來してしまつたのだ。それどころか、「これは、家のことだけではなく、お前達の縁談のことにも關係がありますから

ね」

とそれとなくきめつけければ、千尋は思ひつめたやうに

「母さん、さういふ意味でしたら、あたし……結婚してから、お家が轉業するよりは、そんなお話のある前に、轉業して頂いたほうが、却つて氣樂ですわ……それは、あたし達だつて、昔からのお家の商賣がなくなると思へば、なんだか淋しいですけれども、お家がいまのまままでなくてはお嫁入り出來ないなんて、それこそ、いつそうみじめですわ」

なぞと、言葉はやさしく、流石に面映ゆげではあつたけれど、まるで信吉と同じやうな意見をさへ洩らして、形勢はすつかり逆轉しはじめたのだつた。くすろ未亡人は、はななだ心外であつた。

もとより彼女は、さういふ千尋のうしろにあつて、あの温厚篤實なる志氣太までが、自分を反對の立場から千尋をケンかけてゐようなどとは、とんと存じてゐ

ないのであるから、これには甚だしく失望すると共に、もうずつと前から、自分だけでひそかに抱いてゐた、千尋への縁組についての或る重大な期待の上にさへ不安を覚え、

(あんな無分別な娘では、とても思慮深い志氣太さんの、お氣に入つては貰へません)

などと、心ひそかに、氣を揉むのであつた。

町内の發展會長までして、商賣熱心だつた亡夫の位牌を仰ぎながら、くすゑがそれやこれやを思ひめぐらしてゐると、萬壽子と千尋が、湯上りの揃ひの浴衣に着がへて、奥から出て來た。

「母さん。兄さんは？」

「組合の寄合ひがあつて、出掛けましたよ」

佛壇に向つたまゝ、くすゑが答へると、萬壽子は、屈託のない聲で、

「ちいちゃん、そのへんまでお散歩に行つて來ますから」

さういつて、二人連れ立つて表のはうへ出て行つた。

——未亡人は、いつまでも佛壇の前に、坐つてゐた。

二

明るい街を通りぬけて、夜店のある廣い通りのはうへ、姉と妹はあるいて行つた。

「ちいちゃん。母さん悲觀してたわ」

あるきながら、萬壽子がいつた。

「あらどうして？」

「だつて、味方にしようと思つて呼びよせたあんたが、兄さんの味方になつてしまつたんですもの」

「まア、あたし、そんなつもりではないわ。だってあたし、ほんたうに自分の思っただけをいつたんですもの……それに、同じ一家のなかで、味方だの味方でないだのつて、そんなこと考へるのいやよ、姉さん」

はげしいベルの音を立てて、氷屋の自轉車が、暑苦しい風と共に、二人の横を駆けぬけて行つた。夜の街には、涼みの人たちが賑つてゐた。

「ちいちゃん、けふ兄さんに會つて、はなした？」

「ええ、ちよつとね。姉さんが髪結さんへ行つてた時だわ」

「なんていつてたの？ 兄さんは……」

「あたしの顔を見て、いきなり、なにしに來た、つて笑ひながらいつたわ。だめよ姉さん。母さんがあたしを呼よせたわけなぞ、兄さんはもうちやあんと見抜いてるんですもの」

萬壽子は、しばらく黙つてあるいてゐてから、呟くやうにいつた。

「兄さんは、商賣をやめてどうするつもりなんでせう」

「あら、姉さん一緒にあるて、聞いてゐないの？」

「だめ。あたしにはなにもいはないから。ちいちゃんには話したでせう。何處か會社へでも、お勤めするつもり？」

「さあ。あたしにもよくは判らないけど、いづれさうなんでせう。でも、すぐではないらしいわ」

「あら、すぐではないつて、をかしいわね」

「だつて、うちはいま、そんなに困つてゐないからでせう」

「まア、だからあたしにはわからないのよ。困つてゐないのに轉業しようつて兄さんの氣持が……」

樂天家の萬壽子は、平素あまりさういふことには關心を持つてゐなかつたけれど、いざとなると、千尋とは違つて、母と同じ意見であつた。

「でもね、姉さん。兄さんにいはずと　それだから誰よりも先にやめるんだつてことだわ」

「あたしには、わからない。ちやア、もし廢業するとしたら當分遊ぶつもりなの？」

「うゝん。さうちやないわ……いま兄さんはね、廢業してからあとの、自分の新しい仕事のことなど、殆ど考へてゐないらしいのよ。なんでも、組合の中へ、共助組織とやらを作りたいつてそれで夢中らしいわ」

「なにさ、その共助組織といふのは」

「あたしにもよくわからないけど、なんでも、みんなが轉業するとなれば、あとに残る人たちは、その商賣を保證されるわけなんですよ。だからどうしてもさういふ組織を作つて、やめて行く人達のねきものを買ひあげたり、いろいろとお互に助けあふ組織なんですつて。さういふものがまだ充分しつかり出來てゐないか

ら、お互に腹のさぐりあひになつて、苦しまなければならぬんだつて、兄さんはいつたわ……むろん兄さんは、まづ自分が助けてもらふつもりでさういふものを作るのではないから、それとは全然別に、いつでも轉業出来る身構へを作りたいんだつて、いつてたわ……あたし、やつぱり、兄さんはえらいと思ふ……」

萬壽子は、暫らく黙つたまゝあるいてゐたが、やがていつた。

「ちいちゃん。もうよしませうよ。そんな話。折角の愉しい夜が臺なしたわ」
千尋も、明るくうなづいた。

二人はいつのまにか、夜店のある廣い通りへ出てゐた。

三

公設市場を街のまん中へぶちまけたやうな、賑やかな夜店であつた。
とりすました美しい街の表情はなかつたけれど、夏の夜の親しみ深い雑踏と、

素朴な思ひ出にあふれた街であつた。

「もうじき、祇園祭ね」

あるきながら、千尋がしみじみといった。

「さうね。あんたまた、その頃来ない？」

「さア、たぶん来られないでせう。だつていま、とても忙しいんですもの」

草花を賣る店の前では、夜露にしつとりとぬれた花々が、眼にしみるやうな鮮やかな艶をたゞへてゐた。

「ちいちゃん。あんたこの頃、肥つたぢやない？」

「さうかしら」

「あら、自分でわからないの？」

「わからないわ。だつて夏やせていふぢやない。あたし、やせたかと思つた」

「うゝん。肥つたわ。たしかにすこし肥つたわ。栄養がいいからかしら」

「働くからよ」

萬壽子は、千尋の顔をつくづく見やつた。

「あんた、幸福さうね」

「あら、さうかしら」

「さうかしら、なんて氣取つてるものぢやないわよ」

「だつて、よくわからないんですもの。姉さんはどう？」

「あたし？ あたしは駄目。毎日母さんに、いちめられてばかりゐるわ」

「まア、どうして？」

「だつて、あたしもう二十四ですもの……」

人混みの中から、識つた顔が二つ三つ、明るい會釋を交はして通り過ぎて行つた。

「あたし、母さんは好きだけれど、あれだけはたまらないわ……そのうへ、新聞

を見ても、ラジオを聴いても、映畫でも、小説でさへ、このせつはジャンジャン
せきたてるんでせう。あたしもう、いやんなつちやつた」

「姉さんも案外ね。あたし、もつと呑氣かと思つた」

「だつて、こればかりはさう呑氣でもゐられないわ……下手にあわてて、やかま
しいお姑さんのところへでもやられたら困るぢやない」

千尋は、黙つたまゝあるいてゐたが、やがて低い聲でいつた。

「さうね。あんまりやかましいお姑さんはいやね……でもあたし、やつぱりお年
寄りは、大事にしてあげなきゃいけないと思ふわ」

「まア。するぶんしほらしいのね」

「別にさういふわけではないけれど、でも、この頃のやうに戦争に勝つためにい
ろいろと辛棒しなくちやならない時代になると、あたし特にさう思ふわ。だつて
あたしたちは若いから、どんな長期戦だつて、將來に大きな希望を持つてゐられ

るけれど、先の短いお年寄りには、あたしたち若い者のために、辛棒してゐて下さ
るんですものね」

「ふーん。わかつた」

萬壽子は、いたづらツぼく眼をみはりながら、

「それはさうね。だけど、あんたが特にさう思ふ氣持がわかつたわ。あんたは、
幸福ね」

いひかけて、ふと萬壽子は、なにか大事なことも思ひ出したやうに、急に眼
をかがやかせながら、

「さういへば、志氣太さんは時々富橋へ出ていらつしやるの」

「ええ。時折ね」

「何しにいらつしやるの？」

「本を買ひに來られるんでせう……それが、どうかしたの？」

「うん。なんでもないけど……ほら、こないだ古梅園で、母さんといつしよに志氣太さんに逢つた時ね、あの方、とてもきれいなひとといつしよだつたわ」

四

「まアさう」

何氣なく答へながらも千尋の胸は軽くどきツとなつた。

「幾つくらゐのひと？」

「さうね。もう二十七、八くらゐかな。でも、とてもきれいなひとよ……志氣太さんは、子供のころの友達だつていつてらしたけど……あんた心當りはないの？」

「……知らないわ」

「あの時志氣太さんは、あたし達に會つたことは話しても、そのひとといつしよだつたことは話さなかつた？」

「え。そんなことまでは話されないわ。でもあの方にだつて、子供のころのお友達くらゐ、あつたとしても不思議ないぢやない」

すると萬壽子は、急に大きく眼をみはりながら、

「うん。駄目々々。それがね、なんだか少しをかしいのよ。あの時あたしたちが古梅園へはいつてゆくと、その人と話してゐた志氣太さんは、あたしたちにそのひとを紹介しながら、一寸マゴ／＼してあたまをかいたりしたのよ。だつて志氣太さんみたいな、あんな立派なお醫者さまが、あたまをかくなんてをかしいぢやないの？……ちいちゃん。あんた、しつかりしなくつちや駄目よ」

いひながら千尋の肩を軽く叩いた。

「あら、いやだわ、姉さん。そんなをかしなこと云はないで頂戴」

千尋はすつかり戸惑つて、姉の顔を軽くにらんだが、けれどすぐに、すこし前から胸の中で妙にドキ／＼と躍りはじめた小さな獣みたいなものに氣がつくと、

一層途方に暮れて、どうにもならない氣まづさのやりばに困つたやうであつたがふと、すぐそばの人込の中に、金魚屋の明るい店先が眼につくと、

「あら、きれいな金魚！」

いひながら、ほつとしたやうに、人込の方へ駆よつて行つた。

明るい夜店の、金魚屋であつた。

道の上に幾つものならんだ白い圓い器の中には、夜の灯りに照らされながら、赤や、白や、黒やぶちの、大小さまざまな金魚たちが、生きものとも思はれない鮮やかさで浮んでゐた。

萬壽子もいつのまにかやつてきて、千尋とならんでしやがみ込むと、もうケロリとした顔つきで、無心に金魚を眺めはじめた。

「まア、きれいなね」

「この琉金、いゝわね」

「右の尾がまがつてるぢやない？」

「こちらの、赤と白のぶちの方がきれいかしら」

「あら、この出目ちやん死んでるみたい。うごかないわよ」

大渦卷の揃ひの浴衣を着た姉妹が、袖を膝に拾ひあげ、並んでしやがみながら金魚にみとれてゐる姿は、ひと目には明るく平和な夜店の風景であつたけれど、千尋の心は暗かつた。

「ふしぎね、姉さん。こんなきれいなおさかなが、水の中で生きてるなんて……」

「生きてるんだわ」

「これでも、なにか考へてるのかしら」

「考へてるかも、しれないわ」

「でも、どうして、はなしをするのでせう」

「さあ……」

「ものがいへないのぢやない……おさかなつて」

「かなしい生きものね。ものがいへないなんて……」

萬壽子は、やがて、立ちあがった。けれど、千尋はいつまでもうごかなかつた。

五

月が出たのであらう。

丸窓の障子に庭の植込が影をおとし、立てつけた簀戸越しにくちなしの香りが甘くたゞよつてゐた。

千尋は眠れなかつた。

倉松の家では、龍樹先生夫妻と千尋が、母屋の方へそれぞれ部屋をとり、志氣太は一人だけ離れの方へ寝ることになつてゐた。

富橋から歸つて以來、もう三日になる。その間、夜毎眠られない千尋だつた。

寝ついたかと思ふと、あの時の金魚の姿を夢に見たりした。

むろん千尋は、あの折、姉の萬壽子から聞かされた話など、もうなんと心の中で打消したか知れなかつた。少くとも、さうするやうにつとめてゐた。

實際、映畫を見たり、みつ豆を食べたり、さういふ噂話をほり出したりすることに目を暮してゐる萬壽子のいふことなど、あまりあてになるものではないのであるし、またそれに、女たちの中には、わけても狭い田舎の人たちの中には、男と女が一しよにゐたりすると、もうすぐ妙な想像の火を燃やしたり、潤色たつぷりな創作をでつちあげたりして、他人の名譽の危険において、自分が無意識に渴望してゐる夢を弄ばうといふやうな、きはめてゆたかな藝術的天分をそなへた人たちがなかなか大勢ゐるものなのだ。

で、もとより、當り前の娘ではあつたけれど、それくらゐの反省は充分持ち合せてゐた千尋は、姉の誇張をふくんだ言葉など、もう何度も心の中で打消しては

みたのであるが、けれど、それにもかゝはらず、例の古梅園における志氣太云々の一件は、妙に頭の隅にこびりついて離れないのだった。

ふり離さうとすればするほど纏ひついて来るやうな、不安であり、苦しさであった。

千尋は、ふと思った。

——さういへば、いつだったか、アルコール・ランプの故障のお蔭で、炭火をつかんで火傷をした、あの頃以來、なぜか志氣太さんは、あたしの視線を避けるやうにしてゐるではないか……。横を向いたまゝ、用事を云ひつけたり、診察室や薬局で二人つきりになつた時など、妙にガタピシと仕事を片付けて、立つてしまはれたり……。あれは一體どういふことなのであらう？……。

そんなことを思ふと、千尋はなんだかまつ黒な淵でもものぞいたやうな、いひやうもない氣持になるのだった。

しかも、考へてみれば、志氣太は、まったく無頓着で開放的で、よく學生の頃や子供の頃の腕白話しなど賑かにぶちまけては笑はしたものだ、けれど、それらしい幼馴染の話などは、まだ今までに一度も聞いたことはなかつた。

思へばこれも不安のタネだった。いやこれこそ不安の中心であつたかもしれない。

(それにしても、姉が會つたそのひとといふのは、一體どんなひとなのであらう)
(ほんとに志氣太さんは、その時あたまをかいたりしたのであらうか)

——あれも考へ、これも思ひ、次から次へときりはなかつた。

月影が傾く頃になつて、それでもやつと、千尋はねむりにつくことが出來た。

——どうやらまた例の、何かにつかまつてゐないとうまく寝つかれないといふ、あの何んとも變てこな癖が再發したらしく、片方の掌で、しつかり夏蒲團のへりにつかまりながら……。

風雨近し

—

幾日も續いた日照りのあとから、どんより曇つたむし暑い日々がやつて來た。青柳村では、もう田植えはすつかり終り、とりいれた麥の始末も片附いて、土用蠶がはじまつてゐた。

372

「はかにいきるで、またお降りるかのん」

「さうだのう。だが、波鳴りが聞えるで、またひとあれ來るかも知れんぞな」

「波鳴りが聞えるかのんし」

年寄たちは、家々の軒に立つて、遠い野づらの向ふへ耳をすました。

田圃では、植えられて間もない若々しい稻の苗が、吹きよせて來るなまぬるい微風にそよぎ、時どき雲の切れ目を洩れた鈍い陽射しが、鉛色の曇空をバックにして、異様なスポットライトのやうに鋭く斜に野のはてにふり注いだ。

その野づらの向ふから、終日低くひきづるやうな重苦しい波鳴りが、聞えつつけてゐた。

「まんだ、ろくに稻の腰もすはらんちゆうに、吹かれたりしちやアやり切れんのん」

「さうだてん。まアこのいきに精出して桑の葉でも摘んどくさ」

「ふんとだ、ふんとだ」

男も、女も、娘も、子供も、腰つけ籠を尻にさげたり、車を曳いたりしながら慌だしく桑畑へ出て行つた。

夏になつて土用が近づく頃になると、青柳村の附近では、どんより曇つた南の

373

風の吹く日など、どうかすると、ふしぎな氣象の作用で、四里も五里も離れた表濱の波鳴りが聞えることがあつた。

すると、さういふ時には必らず風雨がやつてくると、年寄りたちは昔から云ひ傳へ、云ひあててゐた。

ちやうど雨がつゞいて洪水の恐れが近づくと、川魚たちが砂を吞んで體に重みをつけると同じやうな敏感さで、村人達は慌だしく野良へ出て働いた。畑にも道にもさういふ人たちの忙がしげな顔があふれてゐた。

道のまん中で、さつきからしきりに大きなみみすをつついてゐた一羽のあひるが、急に近づいてきた人の氣配にあわててみみすをくわへたまま、しつぽをふりながらヨタ／＼と傍の小川の方へ駆去つて行つた。

桑の葉を一杯つめた籠を背負つて、一人の年配の男が畑の方からやつてきた。

「おや、仁作さ。お邸でも夏蠶をお飼ひだかえ？」

小川の洗ひ場で、鎌を研いでゐた女が聲をかけた。

「はア。がとうなこともないがのう、今年ア春蠶を休んでしまつたのう」

「さうかえ。わしやまたこんな御時勢だで、やめられたかと思つたら。そりやまア御苦勞なことだのんし」

仁作と呼ばれた男は、そのまゝどし／＼歩きつゞけた。

稲垣の家の男衆だつた。

稲垣邸では、毎年少しづつ蠶を飼つた。大地主のこととて、別に養蠶をして現金収入にするといふやうな、普通の農家の立場とは違つてゐたが、昔からのしきりでありつた。代々、女たちの仕事で、その繭で自家用の羽二重をこしらへたり、又その収入で女たちの髪の毛の道具を買つたり、小遣ひにあてられたりした。そのしきたりが、今だに残つてゐるのだつた。

やがて仁作は、籠を背負つて高臺を登ると、長屋門をくぐつて、二本並んだ土

蔵の横の、わざわざその爲めに造られた蠶室のはうへあるいて行つた。

蠶室の入口まで来て、だが仁作は、ふと室内を見て、驚いたやうに立ちどまつた。が、すぐにニヤニヤ笑ひ出しながらいつた。

「なアんだ。お嬢さまぢやアござんせんか。そんなところで、なにをしてゐなさるだね」

二

薄暗い蠶室の中には、富橋からでも歸つて来たばかりであらう、これはまた明るい色彩のよそほひをした矢奈子が、なにをしてゐたのかしやがんでゐたが、仁作に聲をかけられると、やゝとり亂した姿で立ちあがり、少し顔をあからめながら、不機嫌さうにキツと仁作を睨むやうにした。

美しい顔だつた。

が、立ちあがつた拍子に、いまゝで矢奈子の向ふにゐたもう一人の人物の姿が現れた。陽にやけた黒いすねをむき出しにして、矢奈子と向ひ合ふやうにしなから、同じやうにしやがんでゐたその相手の顔を見つけると仁作はすぐにいつた。

「なアだ。松太郎さんとこの芳坊ぢやねえか。……お嬢さま何をしてゐなさつただ。そんな子供を連れ込んで……」

「なんだつていゝぢやないの!」

浴びせるやうな聲だつた。

「そいでもなんし。こんな蠶室へ、そんな腕白坊主を連れ込まれたぢやア困りますで……」

芳坊が、仁作の顔を仰ぎながら、恐る恐る立ちあがつた。片手に小さなカンカンをさげてゐる。

「あのね」

と矢奈子がケロリとした顔でいつた。

「——芳つちやんに、おさかなを釣る餌をあげたのさ」

「へえ？ 魚釣りの餌？」

「お蠶さまをさ」

仁作の顔が思はず歪んだ。

「冗、冗談ぢやござんせんよ、お嬢さま。お蠶さまを釣りの餌にされちやアたまりませんぜ」

「いゝぢやないの。どうせあたしんだもの」

「いくらどなたんでも、満足なお蠶さまを川へ流されちやたまりませんよ。病蠶でも出たらやつて下され。それに芳坊。釣りに行くなんても、今にお天氣が變るでダメだぜ」

芳夫は、立つたまゝ、なにかえらく悪いことでもしたあとのやうに、今にも崩

れさうな顔をしてゐた。

「芳つちやん。構はないからそれだけ持つてお行き。澤山でもないんだからね。さ、いゝからお行き。誰か大きな子と行くんですよ。危いから。——またいらつしやいね」

矢奈子の聲にはげまされて、もじもじしてゐた芳夫は、急に元氣づき、こはい顔をしてゐる仁作の横を恐る恐るすり抜けて下駄をはくと、後ろも見ずに一目散に駆出して行つた。

「ちえッ。しようがねえ小僧だな」

仁作は舌打ちしながら、地下足袋をぬいで蠶室へあがると、持つて來た籠の中の桑の葉を、部屋の隅へざわざわと擴げはじめた。

「お嬢さまも物好きなお方だなんし。あんな小坊主を相手になさつて、なにが面白えだか」

矢奈子はもう、赫い顔もしてゐなかつた。トボケたやうな調子で、ぜんぜん勝手なことをいひ出した。

「もう初眠はすんだのね」

「へえ。お蔭さまで」

「早く大きくならないかなア……」

「どうなさるんで」

「だつてあたし。四眠がすんで、おやまへはいる頃のお蠶さまが大好きなんだから」

「へええ」

「あの、すっかり大きくなつて薄飴色にすきとほつた、すべのいゝ、冷たい、お蠶さまの肌にふれるの大好きなんだから。頬すりしてあげたいくらゐ……」

「へええ、お蠶さまも、倅せなこつた。それなら、なぜそんなに大好きなお蠶さ

まを、むさむさ、さかなの餌などにやりなさるんかなんし」

三

仁作の言葉に矢奈子はグツとつまると、くやしきうな視線で仁作の背中をチラリと睨んだ。

それでなくてさへ、折角久々に連れ込んだ芳坊を、あつけなく追ひ返へさねばならなかつたのだから、面白くないことはなほだしい。

けれども、すぐに矢奈子は、また元のやうにケロリとした顔になると、トンチンカンなことを喋り出した。

「ねえ、仁作や」

「へえ」

「あたし、いゝこと思ひついたわ」

「どんな事でござんすかね？」

矢奈子は、風に吹かれて白い葉裏を見せてゐる、門の向ふの楡の木を見ながら、

「あのね。今年の、このお蠶さまで出来た繭はね、賣らないで置くのよ」

「へええ。それでどうなさるんで」

「うちで生糸を作るのさ。そしてね。ほら、物置の二階に、お祖母さまがお使ひになつたといふ、はたおり機械があるせう。あれで、あたしの着物を作るのさ。ね。素敵ぢやない。さうすれば、着物を作る人たちの勞力もはぶけるわけだし、

自給自足で、衣料切符なぞいらないぢやない？」

「ダメダメ。お嬢さま」

仁作は笑ひ出した。

「それにしたつて、縣廳のお許しがなきやア、出来ませんでなんし。よしまた、お許しがいらぬとしても、それだつたらいつそ、芳坊なんぞにお蠶さまをく

れてやつたりして、粗末になさつたら駄目でござんすからな。まア、そんなロクでもねえことお考へなさらず、お蠶さまは大事にして下され。これがやがては、立派な日本軍の落下傘になるんでござんすからなんし」

矢奈子は、また黙つてしまつた。へたになにかをいへばいふほど、この場の恰好は、つくろへなくなつてしまふ。

「するぶん暑いね。この蠶室」

たうとう矢奈子は、投げ捨てるやうにさういふと、外へ出て草履をはいた。

「そりやお嬢さま。いきるなアこの部屋だけぢやござんせんで、そのうちにひとあれ來ませうぜ」

矢奈子は答へもせず、サツサと母屋のはうへあるきはじめた。

が、あるきはじめたのであるが、この時、十歩も行かぬうちに、ふと彼女は、なにを見たのか門のはうを見つめたまゝ、いきなりハツとなつて立ちどまると、

みるみるうろたへた顔になりながら、ものもいはず駈込むやうにして、再び蠶室へ飛び歸つて来た。

「ど、どうなさいましたんで」

「うゝん。大ッ嫌ひなのが来たのさ!……」

「へええ。いしましたが、大好きなお蠶さまだと思つたら、こんどは大嫌ひな奴なんで……」

いひながら、仁作は、桑の葉から手をはなして、表のはうを見た。

と、いまでも門を抜けた一人の大男が、伊豆石の敷石道の上をしつかりと踏みつけながら、母屋の正面玄關へ向つて、まつすぐに、ノツシ／＼とあるいて行くではないか。

志氣太だつた。

——矢奈子は、はげしい息づかひに肩を波打たせ、心臓のあたりを両手でしつ

かり押へながら、なかばあきれたやうな顔つきで志氣太のはうを見てゐる仁作の視線を、恐る恐る追ひうかがふのであつた。

四

「倉松の若先生ぢやござんせんか。あの方でしたら……」

いひかけて、仁作は矢奈子のはうへ向き直つたが、ふと気づいたやうに、

「さうさう。お嬢さまは、あの若先生がお嫌ひでしたなんし……だが、どうしてまた、あんな立派な方がお嫌ひなんで」

「虫が好かないのよ」

仁作は、やれやれといふ風に立ちあがつた。

「へええ。わし共ア、情け深え、立派な先生だと思ひますがなんし」

「だからなほ嫌ひさ。行かなくなつていゝよ。お民も婆やもゐるんぢやない」

やがて、玄關のはうから、

「ごめんなさい。ごめんなさい」

大きな聲が聞えて来たが、すぐに女中の民が取次に出たと見えて、静かになつた。

矢奈子は、肩を落しながら、

「あゝ、びつくりした。でもなんだつてあんなひと、ひよつこりうちなぞへやつて来たんだらう。病人もゐないのに……」

仁作は、再び桑の前へ坐り込みながらいつた。

「おや、お嬢さまは、ご存じねえんでしたかな、あの先生はもうこれで三度目でございますがね」

「三度目？」

「はあい、二三日前の、さうさう、お嬢さまがちやうど富橋へお出掛けの留守で

したがなんし、二度ほどおいででしたが、ちやうどまた、旦那さまが、名古屋へお出掛けになる前後のことでしたもんで、ゆつくりもされませんでした……」

「ちやア、お父さんに用があつて来たのね？」

「さうですとも、旦那さまへちきぢき御面會なんで」

「なに用なんだらうね」

「さア、こしとらア、サツパリ存じませんで……なんにしてもあの先生がお邸へ来るなんざ、こんどがはじめてでして、どうりでお天氣模様がただでねえと思ひましたて」

矢奈子は、しばらく黙つて立つたまゝ、仁作の鈍重な仕事ぶりを見つめてゐたが、やがて急に、たまらなく苛々したやうな顔になると、蠶棚を爪でコリコリ鳴らしはじめた。

「もう、お座敷へ通つたでせうか」

「はア、むろんまアお通りでせう、けふは、旦那さまも、どこへもお出掛けなさ
らんでなんし」

「さう、ぢやアあたし、このいきにお部屋へ歸らう」

思ひ切つたやうにいひすてると、あきれてゐる仁作を置き捨てたまゝ、矢奈子
は蠶室を出て聞えるでもないのに足音を盗むやうにしながら、母屋の玄関へやつ
て來た。

その沓脱に置いてある黒い大きな靴へ、はげしい視線をチラツと注ぎなが
ら、さつき芳坊を伴れて、歸つた時に、投げ出したまゝの手提を拾つて上へあが
ると、ちやうど勝手のはうからお茶を運んで出て來た女中へ、

「ご隠居？ お座敷？ お客さんは」

「はア、奥座敷のはうでゐらしやいますが」

「さう、——あの、民や、あたし、ちよつとやすむから、部屋へ來ないでね」

妙な念を押しながら、長い廊下を静かに渡つて、離れの自室へやつて來た。

ぬきあし、さしあし、いつもの彼女とはまるで違つた、いともしとやかな物腰
で戸障子のあけたてをし、自分の部屋へ落着くと、さて、おやすみどころか、庭
に面した窓のそばへ静かにかがみ込み、庭越しに、あけ放した母屋の座敷から聞
えて來る、客と主人の話聲へ、息をつめ、口をくひしぱりながら、ヂツと耳をそ
ばだてるのだつた。

五

「——ふム、それで、こないだおいでの時には、ちやうど出がけのところ、い
そいでしまつて訊き洩らしたが、いつたいあなたは、さういふ話を、なんと思つ
てこのわしのところへ持ち込まれたんぢやな？ だいたいさういふ話は、當の理
事者たる村長のところへ持ち込まれるのが、まづ至當ぢやと思ふが、あんたはそ

れをされたか？ 村長のところへ行かれたのかな？」

鐵齋の餘を懸けた立派な床を背にして、兵衛は、やゝ早ぐちの、ほとばしるやうな口調でまくしたててゐた。

藍がかつたくすんだ色目の地味なかたびらを着て、どつかり正坐にかまへ込んだ兵衛の風貌は、まづどう見ても風呂からあがりたての榮養のいゝ羅漢様といった剛腹な感じで、どんな人間でもこの男の前へ出たら、思つてゐることの十分の一も満足に話せまいと思はれるていの、一種鬱然たる靈氣といったものをさへ、發散してゐるのだつた。

ところで、紫檀の卓をへだててその兵衛と相對して、やゝ神妙にキチンと洋服の膝をまげてゐる志氣太はいふと、「これまた堂々たる——といひたが 實はそんなのぢやアなくて、ただ、例の生きてゐるのか死んでゐるのかわからないやうな顔が、タライの底みたいにもやみと大きく見える以外には、いつもとサツバ

リ變りばえのしない至極あたりまへの志氣太だつた。

「は、村長さんのところへはまだ行きませんが」

やがて志氣太は、ポツリと答へた。

「なに、村長のところへはまだ行かれん？ ふム。それはをかしい。それではあんたは、少し筋道を違へてはをられんかな。——村長のところへ行かれずに、いきなりこのわしのところへやつて來られるなどといふのは、どうもあんたが、なにか勘違ひをしてゐるとしか思はれませんでな。むろんわしは、こんどのは村長や議員の洲崎の考へとること大賛成の者ぢやけども、決してあの連中の尻を煽つてゐる張本人、といふわけぢやないですからな。その點は誤解されんやうにして貰はんと。はッははは……」

叱りつけるやうな調子でものを云つてをいて、いきなりわらふのである。

「いや。私は決して、さういふつもりで伺つたものではありません」